

---

# D.C. ~ refrain love stories ~

黎明龍備

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

D . C . i s r e f r a i n l o v e s t o r i e s

### 【NZコード】

N8481A

### 【作者名】

黎明龍備

### 【あらすじ】

一年中桜が咲いている三日月型の島・初音島。いつもと変わらない春の日に、二人は出会い恋をしました。

深々と桜が舞っている。  
驚くほどさうたつと。  
音もなく。

天使の羽のような花びらの散つざま、まるで永遠を想わせる一瞬。

純一  
ああ、オレってポヒマー

雪のよつて積もつた桜をやへやへへと踏み締めながら、ポリポリと頭をかく。

純一  
冗談はともかく、根本的にソシシリヤスなノリが似合わないよなあオレ

周囲を見渡しても遠近感がぼやけっていて、終わりといつものがない世界。

狂つたよつて桜だけが舞っている。

純一

誰の夢だ一体？

当事者が見当たらぬ夢も珍しい。

自我はあるが、フラフラと文字通り夢見心地で歩が進む。

純一

他人の夢を見せられる。

そんな不思議な体质をもつオレだが、超能力者や魔法使いみたいだ  
なんて喜んでられない。

世間一般には、小説やゲームのように不思議な力を持つている人間  
はかつこいいと言われている。どんなに辛い境遇でも、ありきたり  
よりは救いがあると……。

そんな輩やからに声を大にして言いたい！

他人の夢ほど面白くないものはないって……

意気込みはため息にしかならず、安眠妨害でしかない世界でさまよ  
う。

純一

かつたるいなあ……

夢なんてモノは元から支離滅裂なのに、他人様の夢なんて理解不能  
の極みだ。

自分の知らない人間だけで、説明不足のラブロマンスや、冒険物語  
を見せられておもしろいはずもない。

純一

それにしても、俺が登場してることとは、知人の夢だよな  
しかも、これだけ俺が俺でいられるということは、日常に接してい  
る人物になる。

純一

こんな詩的<sup>ポエミー</sup>な夢を見る人物となると、それほど数はいないから  
……

指折りながら、明日折檻することになりそうな人物を数える。

純一

ふふふふ……俺の安眠を妨害することが、どれほど恐ろしいか  
思い知らせて……

小指だけ立てた状態で声を失った。

導かれるように進んでいた桜の林が拓<sup>ひら</sup>けて、桜の王様みたいな木が  
現れた。

純一

……  
でか

「冗談を口にするが、見る者の心を揺らす不思議な雰囲気を纏つている。

田の奥が熱い。

声を失うような張り詰めた空氣に、ふと、人の気配が混じった。  
あまりにも非現実的な景色に鳥肌が立つ。  
舞い散る桜に誘われるよう、一人の少女が立っていた。  
その少女は、天使でなければ悪魔であろう。

夢の少女

「ただいま、お兄ちゃん……」

純一

……

夢？

純一

……ああ、そうだ。夢だつたなコレは

常識的な発言が、そもそもその通りなのだと苦笑いが浮かぶ。  
本当の名前は思い出せないけれど、コイツは幼なじみの少女だ。

夢の少女

「見えないけれど、そこに居るよね？」

純一

ああ

夢の少女

「うう。お兄ちやんを感じるよ」

思わずストライクゾーンを踏み外してしまつたが、心の口もつた  
声。

夢の少女

「コレは夢で……多分、田が覚めたら何も覚えてないだろ」など…

…

少女の曇つた顔を見るだけで心が痛む。

しかし、手を伸ばすことや、抱きしめたりしゃぶりや、声をかけてや  
ることすら出来ない。

決められた夢を見るだけの、出来ないなこの魔法使い

夢の少女

「約束を思ひ出しちゃ」

それは、やうやく。

冬の終わりと、春の訪れを迎える前の夢。

この時点では意味のない

ダ・カーポのような始まりと終わりの夢…。

まぶたに染み込む朝日に視覚神経を刺激され、純一は覚醒の時を迎えた。

音夢

「おせよハヤヒキサム、お兄ちゃん」

目を開けると、なぜか妹の音夢が間近で顔を覗き込んでいた。

純一

「なに……してるんだ？」

音夢

「先に目が覚めたから、お兄ちゃんの寝顔を見つめていたの……」

純一

「そうじやなくて……いや、それでも良いんだけど、ビックリしてお前がここで寝てるんだって？」

音夢

「どうしてって……いつも一緒に寝てるけど、お兄ちゃんつたら、ボケボケさん」

純一

「いつも一緒に寝てる? 誰と誰が?」

音夢

「ねえ、お兄ちゃん。いつも朝の挨拶……して

そう言ひて、音夢が瞳を閉じる。

純一

「これも……夢?」

そうだ、夢に違いない。こんな事が現実にあっていいはずがない。  
いや、いい……そう、これは夢だ!

その瞬間、純一は  
不敵になつた。  
無敵になつた。

純一

「据え膳食わぬはなんとやひ。」  
ありがたく頂戴しつきま  
じゅつ

「つー訳で、いただきます」

音  
樂

卷之三

ゴスツ

純一

硬い口付けとともに、食事は終わった。

七  
七

「おはよう兄さん。今日もいい天気だよ」

日を覚ますと、音夢が楽しげに純一の顔を覗き込んで立っていた。

純  
—

「ガキガキガキガキガキガキ？」

今度こそ朝か…… そう口を動かしたのに不可解な奇声が発せられた。純一の口には、枕元にあつたはずの日覚まし時計が、なぜかくわえさせられている。

音韻

「美味しそう？」

純

……オイシイ「スケ」  
……タマ「ヤ」

電話を取扱ひアーヴィングしながら聞く

音夢

何言つてゐる?20年前の「ホットみたしたよ」

純  
—

……お前が発明したんだよ、

純

あ、普通に声が出た

純  
—

「あーーー…………よし。せじ、みやざめ」

敬礼して布団にもぐりこむ。

音夢

「ちよつと、冗談ばつかやつてるとか」いするよー。」

純一

「大丈夫だ。俺はここから教室まで瞬間移動することが出来る」

音夢

「パジャマのまま教室行つてどうするのー。」

純一はおもへつと起き上がつた。

純一

「おはよう」

音夢

「…………はあ」

音夢は呆れてため息をもらした。

音夢  
「とにかく、早く起きてくれさー」

そう言い残し、音夢が部屋を出でてこいつる。

純一  
「待て、音夢」

音夢

「なに？」

ノブを握りながら振り返る。

純一

「朝の口課がまだだ」

音夢

「えつ、いじよ……今日は大丈夫だし……それに時間も無いし……」

両手を胸で組み、音夢が扉に背をはりつけて首を降る。

純一

「つべ」べ言わず、やうやく済ませ

音夢

「うへへへ」

純一の指での呼びかけに、音夢は小さく呟つてアコアコと呟つてきた。

間近で見つめる頬が真っ赤になつている。

純一

「いいか?」

音夢

「……うん」

音夢はベッドの脇で前かがみになり、腰を曲げて純一の肩に手をつぐ。

一人の距離は急速に縮まり、お互いの吐息を感じじるまでになる。

唇のシワが数えられる距離。

音夢の後頭部に手をまわし 腕を引く。

「シッ

音夢

「いたたた!」

純一

「……1・2・3・4・5」

オーテ「をくつつかて熱を測る。

純一  
「うん、いつも通りの微熱かな」

音夢

純

「熱を測ってるんだから、しようかないたる」

猶如

元をもすじなかに眞夢か喰く

純

体温弱しくせば体温計の表示を「あがす瘤かなおこたれ」

卷之六

純  
—

「じゃあ体温計でもいいが、お前がちゃんと計ってるか、ずっと見ててもいいんだな？シャツの上のボタンを外して、首元から中に手を差し入れるところまで全部だぞ？」

音夢

「うわっ！？ そんな説明しなくていいよお」

純

「……オレだつて恥ずかしいんだから諦めろ」

だいたい普通逆だらう。

少なくとも、毎日学校を休めるなり純一ならありがたことと思つだらうが。

音夢

「むう～…………とにかく、早くしないと遅刻しますからね」

アの回りに音夢が消え、足音が遠ざかってこぐ。

純一  
「鍵閉めたか?」

音夢  
「うん」

純一  
「じゃあ行くか

鞄を肩にのせ、のぞびつと歩き出す。  
舞い散る桜の花びらを全身に受けながら、並木道を音夢と並んで歩く。

音夢

「兄ちゃんと並んで歩くのが、何日かぶりだよね

スキップする音夢が純一の前に回り込み、振り返る。

純一  
「3日がぶつかな

音夢

「むへ、なに冷静に答えてるのよ

純一

「別に慌てて答えたつて仕方ないだろ?」

音夢

「別に、慌てる必要はないけど、気持ちの問題です」

諭すよひこ、優等生な事を口にする。

純一

「はあ……かつたるいなあ……」

音夢

「もひへ、ホントだらしないんだから……」

言葉ほどには非難の色のない音夢の声を聞きながら、宙を舞う花びらに田を移す。

微弱な大気の流れにのって、ひらひらフフフとこんな動きをしながら、窒息するぐらこの数の花びらが、地面に着陸していく。

純一

「しかし、一年中咲いてる桜つてのも、変わってるよな……」

子供のころからそれが当たり前だから、不思議には感じないけど、やっぱ変なんだわ。

音夢

「私は好きだけどな、綺麗で」

純一

「掃除が大変だけどな」

音夢

「もうへ、情緒がないなあ」

その情緒の掃除のために、かなりの労力と資金が使われてるんだけどな。降り積もった桜の花びらを踏みしめながら、純一達は学園へと続く道を進む。

眞子

「音夢おはよー」

後ろから一人のクラスメートの水越眞子が声をかけた。

音夢

「あつ、眞子おはよー」

純一

「よつ、眞子」

眞子は純一を見て動揺を始めた。

眞子

「朝倉ー..どうしたの、熱でもあるの?..」

純一

「なんだ?..あるわけないだろ」

眞子

「だつて、アンタがこんな時間に..ここにいるんだもん。熱があるのかなつて思つて」

純一

「熱があつたから..にいなーだろ」

眞子

「それもやうね」

純一

「あれ、やつこ..え..なんでお前が萌先輩の木琴を持つてるんだ?..」

今まで眞子が持つて..いる物に気にしなかつたが、それはよく見ると木琴だった。

眞子

「だつてこれ持たせてたら、叩..始めるやつて余計遅くなっちゃうか

「ひ

萌

「あ……く……くそ……おひやよし……『それこまか……」

息も絶え絶えの水越眞子の姉・水越萌が純一達に追いつく。四人は並んで学園へと向かった。

廣隆

「よつ、朝倉兄妹。おはよう」

靴から上履きに履きかえていた純一の肩を後ろからポンとたたいた。純一が振り向くと、クラスメートの相沢廣隆あいざわひろたかが立っていた。廣隆は朝倉兄妹と眞子と同じクラスで、純一の親友……いや、悪友だ。

眞子

「相沢、今日は早いね」

廣隆

「あんな…オレだっていつも遅刻してるわけじゃないぞ」

音夢

「兄さんと同じで遅刻ばかりだったと思こますけど」

グサツ

音夢は笑顔でキツい事を平氣で言つた。

だが、音夢や眞子がそう言つのも無理は無い。この一人は遅刻回数が多く、全校生徒の中でも1位、2位を争うといつても過言では無いだろつ。

純一達は昇降口で萌と別れ、教室に向かう。

杉並

「おっ、朝倉と相沢今日は早いな」

純一と廣隆が教室に入ると、二人の悪友・杉並が二カ二カしながら声をかけてきた。

廣隆

「ほつとけ」

近づいてはならない奴の見本ともいべき悪友の顔を見据える。この軽薄さとノリで、実は学年トップの成績、しかも運動も球技全般OKときてる。

しかしこの性格からか、女の子にはモテない。まあ、これでモテていたら友達にはなつていなかつただろう。

工藤

「珍しいな、二人とも。雨でも降らなきやいいけど

と、声をかけてきたのはこの四人の中での唯一ツツコ://担当の工藤だ。

相沢

「誰かと思えば、工藤かよ。朝っぱらからキツいな」

工藤

「珍しいのは事実だろ」

相沢

「まあな

杉並

「ところで相沢、朝倉。素晴らしい企画があるのだが、お前達も参加せんか?」

純一

「くだらない企画の間違いじゃないのか?」

杉並

「そんなことは無いぞ。『白河』ことりが卒業までに何人に告白されるか?」といつ、素晴らしいクイズ大会だ

杉並の言つ『白河』ことりとは、この学園の中では知らぬ者がいないほどの、アイドル的存在の少女だ。

相沢

「…賭けの間違いじゃないのか?」

杉並

「何を言つ。これはれつきとしたクイズ大会だ。無論、正解者には豪華景品が進呈される」

純一

「配当だろ」

杉並

「今のところ、一番人気は50～60人というところだな」

純一

「そりや、凄いな」

杉並

「何と言つても、白河ことりだからな。俺は大穴で、100人は越すのではないかと思つていい」

廣隆

「100人か……」

突拍子もない人数だが、彼女の人気を考えれば、不可能な気がしない。

眞子

「まったく、あんた達つてホント、しょうがないわね……」

純一と廣隆は後ろを振り返ると、眞子が蔑むような目で、こちらを見ていた。

純一

「コイツと一緒にするな眞子。俺達はまともだ」

杉並

「何を言ひ、ＭＹ同志・朝倉、相沢。共に戦つた中ではないか」

廣隆

「いつ、どこで、何を、どうやって、誰が、なぜ？」

杉並

「先週、ゲーセンで、ゾンビ退治を、ガンを使って、俺とお前達が、教授の野望を阻止するために」

純一

「.....」

廣隆

「.....」

杉並

「.....」

朝倉&廣隆&杉並

「同志よ」

三人はがつちりと肩を組み合つ。

眞子

「..... あんた達つてバカ」

純一達をジト目で睨み呆れ顔で呟いた。

授業が終わり、昼休みになると、廣隆は席を立つた。

廣隆

「朝倉、昼飯はどうするんだ？」

工藤、杉並の姿はどうにも無く、どこかに昼飯を食べに行つたのだ  
う。

純一

「学食か購買のどっちかだな」

廣隆

「でも、今から購買に行つても売り切れてると想ひけど……」

純一

「……」

廣隆

「……」

完全に出遅れた二人の昼飯は学食とこう選択肢しかないようだ。

純一

「しょーがない、学食に行くか

廣隆

「だな」

二人が教室をでると、

信幸

「おー、相沢、朝倉」

と声をかけてきた。

二人が声のしたほうを向くと、一人の男子生徒が立っていた。

稻葉信幸いなばのぶゆきと相樂俊樹さがらとしきだ。

信幸はサッカー部所属のキャプテンで、運動神経抜群だ。俊樹は恋愛経験+なぜか人生経験が豊富、純一達の中ではよきアドバイザー的存在。

野球部に所属のキャプテンだ。

俊樹

「これからメシか?」

純一

「ああ」

純一が頷くと、信幸はちょうどいいとも言いたげな顔をした。

信幸

「これから学食で、榎と北川と一緒に食うんだけど、朝倉達も一緒に食わないか?」

信幸の言つた榎と北川とは、純一との共通の友達だ。

廣隆

「いいね。やっぱメシは大勢で食うに限るよな

俊樹

「んじゃ、取り敢えず学食に行こ」つぜ」

といつような話しの流れで、四人は学食に向かつた。四人が学食に到着すると榎と北川が窓際の席に座つていた。

要

「よつ、稻葉、相楽。遅かつたな」

稻葉達の姿を見て榎要さかきかなめが声をかけた。

榎要は頭脳明晰で、杉並と共に1位の座を争つほどである。

圭一

「朝倉と相沢も一緒にだつたのか」

要の隣りの席に座つていた北川圭一きたがわいっしが純一と廣隆の姿に気付いた。北川圭一は1年の時に、純一、廣隆、杉並の三人と共に年間行事には必ずお茶目なことをしでかした。

そのことで純一達はブラックリストに載り、先生や風紀委員も彼らに目を光らせている。

音夢

「兄さん達も学食ですか？」

圭一の正面に座つていた音夢が、純一達を見上げた。

純一

「音夢お前も学食か？」

音夢

「たまたま学食に来たら北川君達に会て、一緒に食べようつてことになつたんです」

純一

「お前、本当は俺達を監視しに来たんじゃないだろうな？」  
と、純一は思つたが口には出さなかつた。  
いや、口には出せなかつたといつほうが正しいだらつ。

美春

「先輩方も一緒に食べましょつよ」

音夢の隣りに座つていた天枷美春あまかせみはるが顔を覗かせた。

美春は純一達のひとつ下の後輩で、過激なほど音夢になつていて、  
純一達からは『わんこ』と呼ばれている。  
純一達は席に座つた。

要

「そつていばもうすぐ物理のテストだな。朝倉、相沢ちゃんと勉強してゐるか？」

要はカレーを一口食べて純一と廣隆に視線を移した。

音夢

「兄さん達が勉強をしてる姿が想像できますか？神君」

音夢が純一達に変わつて答えた。

要

「いや……想像できねえ」

純一

「だいたい、テストなんてあるのがいけないんだ。なあ、相沢」

廣隆

「ああ、その通りだ」

全員呆れ顔になる。

まあ、純一や廣隆の言い分はわからないわけでもない。  
純一達が3年になつて、今のクラスに慣れ始めてからまだ一週間しかたつていなからだ。

なぜこんな事になつたかといふと、話しさ三日前に遡る。  
三日前、物理担当で、純一や廣隆の担任の暦が、  
「来週テストをやるぞ」  
といきなり言つたのが事の始まりだ。

廣隆

「暦先生もいきなり『来週テストやるぞ』だもんな」

美春

「大丈夫ですよ先輩。そういう時にはコレです」

そういうて美春が取り出したのは、一本のバナナだった。

純一

「バナナ?」

美春

「はい。バナナパワーに頼るといいですよ」

美春はかなりバナナが好きで、どれくらい好きかといつと。

要

「……美春、お前何食つてんだ？」

美春

「はえ？ バナナカレーじゃないですか」

何にでもバナナを入れるほどバナナが好きなヤツだ。

圭一

「バ、バナナカレー……お前よくそんな~~氣色~~の悪いもの食つてるな  
……」

と、要の隣りに座つていた、圭一が言つた。

美春

「失礼な。バナナカレーは、専門店にもある立派なトッピングです  
よ。ぴりりと辛いカレーにはほのかなバナナの甘みが……」

美春は瞳をうつとりと潤ませていた。

皆苦笑いをしていたが、美春の口には当然バナナカレーしか~~書~~つていなかつた。

放課後

純一が商店街をふらふら歩いていると、ふいに後ろから肩を叩かれた。

廣隆

「よつ、朝倉。暇そうだな」

純一

「別に、そういうわけじや……」それからビルへ行こうかと、綿密な計画を練っていたところだ

工藤

「そういうのを暇つてこうんだろ」

廣隆の後ろから顔を出した工藤が苦笑する。

廣隆

「どうだ朝倉？久方ぶりに肉弾戦ニアホッケーといかんか？」

# 「肉弾戦ねえ」

最近体動かしてないからな

「お、また『かつたりい』が出るか?」

「ニヤニヤと笑う廣隆、純一はなんだかよく分からぬが悔しい気持  
ちになつて言い返した。

純  
—

「…誰が！よし、啖けてやねひじやねーか

廣  
隆

「うむ、それでこそ漢といつものよ。上藤、公平を期すためだジャッジを頼むぞ」

いきなり名指しで審判に抜擢された工藤が目をしばたかせる。

工藤

「は!? お、俺が?」

純一

「そりだな、我ら共通の友人たるお前なら、厳正に勝負を見張ってくれるだろう」

工藤

「なんでそりなるかな……別に、普通に順番で遊べばいいじゃないか。ゲームなんだし……」

ちちちち、と指を振る純一と廣隆の仕草が見事ユニークンする。

廣隆

「分かっとうんな。遊びに本氣を出してこそ大人の男といつものだ」

純一

「そりともーなあ友よ」

純一と廣隆はがしりと腕を組み合つた。

工藤は溜息をついた

工藤

「…………ユルいんだか熱いんだか……。俺、未だにお前らがよく分か

らなによ

困ったように溜息をつく藤を引き摺るよにして、純一達はゲーセンへと向かった。

一方、榎達はといふと

圭一

「これから何処かに行くか？」

要と圭一は校門を出たといひで話し合っていた。

圭一

「んじゃ……公園でも散歩するか？」

要は、何が悲しくて男と公園なんか行かなきゃならないんだ！とも思つたが、このまま帰つても何もすることがないので渋々圭一に従つた。

要

「……予想はしていたが……散歩してるのは老人だけか……」

と、要は悲しそうに呟くが圭一はお構いなしに道筋から外れ、桜の林の中へ入っていく。桜の花の匂いがより強く鼻腔をくすぐる。どうやら圭一は目的があつて此処に来たらしくと彼の後を付いていきながら、そう思った。

目的地に着いたのか圭一が足を止めた。

要も足を止めると、そこは子どもの頃、秘密基地と呼んでいた場所だ。

圭一、要、信幸、俊樹、廣隆の五人が始めて出会った場所でもあつた。

要は懐かしさが込み上げて来た。

満開の桜。

何歳になるのか考えると気が遠くなってしまいそうな、太い幹。見るものを圧倒するようで、何だか、優しくもある。

要  
「……ってか、今見てもすげいな」「は

要が桜を見上げていると、すぐ近くから歌声が聞こえてきた。

要  
「……ん? 歌? こんな所で?」

妖精が歌っているかのよつた、綺麗な歌声。

要

「誰なんだ？」

すぐ近く 桜の大木の背後へと回り込む。

桜の花びらが舞い散る中で、少女が髪をなびかせながら、歌声を奏でていた。身体が動かない。

見とれるというのは、こうじつことなんだなと思いながら、ただただ歌声を感じていた。

……。

……。

……。

ことり

「……え？」

要

「……あ？」

猿の惑星で人間を発見してしまったように、一人は見つめ合ひ。歌声は途絶えてしまい、今はただ耳の中に余韻として残っているのみ。

要

「……」

ひとつ

「……あの、いつからそこに居ました?……私、歌っていると、回りの事が頭に入らなくなつむやつんですね」

てへへと笑つて、頭をコシンと小突いた。

そんな風にすると、わいせつの堂々たる歌いつぱりが、何だか嘘みた  
いに思えてくる。

要

「3日くらこ前かな」

ひとつ

「……えつ?……何だ、冗談ですか。それで、いつからですか?」

要

「こつからつてこつか、まあ、2、3分だと思ひ乍ら」

と言いつつ、時間の感覚なんてなかつので、よく分からない。  
まあ、1時間ではないと思つが……。

ひとつ

「今の歌、10分の曲なんですよ。だから10分より長いって事は  
なこと思つたです」

要  
「ああ、なるほどな。やつこやかつきも、キリのいい所で俺の事に  
気がついたみたいだし」

ことつ  
「はい」

につこうと笑う。思わずぐしゃぐしゃとやりたいくなるぐらい、人  
懐こい笑顔。

圭一

「要つー！」

要の後ろから恨めしげに圭一が近づいてきた。

圭一

「お前ー、いつ白河ことつと知り合つたんだ？」

要の首筋に腕を絡ませ、いつでも絞められるようスタンバイをし  
た。

要

「ていうか、俺の事覚えてる?」

要は圭一を無視した。

ことり

「え……?」

その驚きに、微妙に悲しくなる。

人から忘れられるっていうのは切ないものだ。

要は目の前の人とまともに会話をした時のこと思い出した。

……あれがまともかどうかは微妙なところだが。

話しは去年のクリスマスパーティーの日に戻る。

要が体育倉庫の片隅で寝つ転がっていると、  
(理由はまあ、皆の想像に任せるとしよう)

最初は太股だけだったから誰だと思ったけど、見上げた要の視線に、  
月明りを長い髪に反射させて、それこそ月から 別の世界から現  
れたように立っていた。

風見学園に知らない者はいない、アイドル的存在の少女。

要

「白河ことつ」

ことり

「えつ？誰かいるんですか？」

ことりは急に声をかけられた事に驚き、辺りをキョロキョロと見回  
す。

要

「下であぐりをかけてるよ」

ことり

「あ、『」めんなさい。よく見えなくて……こんな所でなにしてるんですか？」

要  
「自分でもそれを考えてた……でもいいのか？それこそ、こんな所で男と一人つきりで」

ことり

「へ？あははは。あなた、いい人ですね」

要

「悪い人だつて」

ことりは、首を横に振った。

ことり

「ううん、私には分かるあなたの感じ、いつまでも割れないシャボン玉みたい」

要は首を傾げた。

要

「なんだそりや？」

「」とつ  
「屋根よつ高い所にあつて、こつ割れてしまつんだらひつ、つ  
氣になつちやつ」

要の頭の回つには『?』が沢山浮かんでいた。

要  
「よく分からぬ」

ことつ  
「説明すると私もよく分からないです。うん」

ことつがひとしきり笑つて頷く。  
まるで普通の女の子にしか思えない雰囲氣に、本当に学園のアイデ  
ルなのかと疑いたくなる。

要  
「まあ、俺の事はさておき……田河もロンテストに出たのか?」

ことつ  
「うん。ちょっと色々あつて……その前に、隣にいても邪魔じやな  
いですかね、私?」

要

「どうぞマジアにて行儀よく座り、再び話しあつた。

一九四

「…………」「とつせん、それ関係あるのか？」

一七〇

卷之三

## 要

「…………」と、それ関係あるのか?「

一七〇

「全然ないです。……で、あなたの名前は？」

要

「…………召喚の魔の者じやなこ」

要は「ひとつ質問をばぐりかして答えた。

「」

「…………まだがなけー」

と素なのかボケなのかは分からぬが、要に返した。

要  
「…………まだだれつかなあ」

ひとしきつ思ひ出した後要は「」とりを見た。

要

「覚えてないか？あの、クリス

」

「」

「ああ、はい、クリスマスパーティーの時の」

言こと終わる前に、「」とつがパンと手を呂いた。

「」とつ

「名乗るほひの者ではないわん」

要

「……良くやつしまで覚えてるな」

要が感心した。

大抵の人はあの程度の事など、忘れていても可笑しくはないのに、スゴイ記憶力だな

ことり

「記憶力には自信があるんですよ」

びしつと、親指立ててみせる。

ことり

「でも、何であの時、名前を教えてくれなかつたんですか？」

ことりの疑問は当然だつ。

あの時『名乗るほひの者ではない』とはぐらかし名前すら教えてな

いのだから。

正確に言つと、教えられなかつたというほうが正しいのだが。

要がはぐらかした後、携帯電話に風紀委員の天枷美春から連絡が入つた。風紀委員が中庭で杉並を捕獲したので、コンテストに参加してゐる音夢の変わりに護送を手伝つてほしいという内容だつた。

一刻を争う事態のためにことりとはそこで別れ、中庭に向かつた。

要が着く前には杉並は逃走していたが。

因みにクリスマスパーティーが終わつた後、要は天枷に『何故俺が杉並の護送を手伝わなければならなかつたんだ』と訊いたところ、『誰にも連絡が繋がらなく、唯一連絡が繋がつた榊先輩に救援要請をしたんです』と答えた。

要

「一時的な記憶喪失に陥つてな」

ことりの問い掛けをまたはぐらかした。

ことり

「それは大変でしたね」

要

「……」

「ことりつて、冗談が通じない？」

ことり

「うへ……」みんなにはぐらかされるなんて、もしかして教えたくな  
い……?」「

要

「榊、榊要」

要は潔く自分の名前を教えた。

ことり

「榊君ですね」

また、ぴしっと親指を立てる。

ことり

「ええっと……

ことりは北川に視線を移した。

圭一

「俺は圭一、北川圭一」

要の首筋に絡ませた腕を放した。

要

「で、白河」とつ

要も真似して、親指を立てた。

要

「「」といつて呼ばせてもらつて、いいんだつたよな？」

ことつ

「ええ……くしゅん

ふるふる、ことつが身体を震わせる。

ことつ

「ずっと歌つていたから身体が冷えてしまったみたいで

圭一

「大丈夫か？早く帰つて暖かくして寝た方がいいぞ」

圭一が心配そうに言つと

ひとり

「 そうですね、私はこれで失礼しますね」

と答えた。

ひとり

「 ではでは、さよならです」

要&圭一

「 ああ、じゃあな。 気をつけて帰れよ」

二人は見事にバイバイと手を降る仕草がユニークンしていた。  
鼻をすんすんいわせながら、ひとりは去つて行つた。

桜並木を一人歩いている男がいた。

廣隆だ。

桜並木からは一本道で、その先には廣隆達が通う風見学園がある。端から見れば登校風景に見えるが、今日は日曜日だ。当然、登校してゐる生徒は廣隆の他に誰もいない。無論彼も制服ではなく私服で登校してゐるのだが。

これには訳があった。

火曜日（明後日）物理のテストがあり、廣隆は珍しく、少し勉強でもしようと考えたが、教科書を全部学校においてきた、という大失態をやらかしたのだ。（まあ、普段から教科書を家に持つて帰れば、こんな目にはあわないのだが……）

そのため学校に取りに向かう途中だった。

廣隆

「ハア……なんで日曜に学校なんぞに来なきやならないんだ……」

と愚痴を漏らしたが、自分の失態なのだから仕方ないと自分に言い聞かす。

昇降口に到着すると、上履きに履き替え、3年1組（自分の）教室に向かつた。

廣隆

「なんか……私服で来ると、卒業生が懐かしんで学校に來たみたいだな」

誰もいない廊下を見渡して呟いた。

さすがに部活以外で学校に來る生徒はいないだらう、一名を除いて

は。

教室のドアを開けるとそこには見知った顔があった。

眞子

「あれ、相沢。何しに来たの？」

教室に入った瞬間、そこにいた眞子が珍しいものでも見るような目で廣隆を見る。

廣隆

「眞子？お前に何やつてんだ今日は日曜だぞ」

教室には誰もいないと思つた廣隆だったので驚いた顔をしてくる。

眞子

「私は部活の練習よ」

廣隆

「そういえば、眞子は音楽部だったな

廣隆は納得したように頷いた。

眞子

「で、アンタは何しに來たの？」

眞子はいろいろ考えたが廣隆が学校に來る理由が思い浮かばなかつた。

廣隆

「……ちょっと野暮用でな」

そういうて自分の席に近づき、眞子には見えないよう教科書を鞄に入れた。

眞子

「アンタ教科書持つて帰つてなかつたの？でも、まあ、仕方ないか相沢だし」

ジト目で睨みながら言った。

廣隆

「……余計なお世話」

廣隆は教室からでようとすると眞子がため息をついた。

眞子

「アンタ……私服で校内をうろついてると、浮いててカッコ悪いわよ」

冷たく言い放つ。

廣隆

「まさか日曜にこんなに人がいると思わなかつたんだ」

足を止め、振り返りながら言った。

眞子

「この時期は、新入部員が入つてきたりして忙しいからね。まあ、恥ずかしいから、なるべく人に見られないように帰るのね」

廣隆

「大きなお世話だ。このやかまし女」

眞子

「な……なんですってえーーー？」

眞子は拳をワナワナと震えさせて、廣隆を睨む。

廣隆

眞子の怒りが爆発しないうち、さっさと逃げよう

廣隆は教室を出て、一旦散に昇降口に向かった。

信幸

「あれ？ 相沢じやないかどうしたんだ、日曜なのに学校に来て？」

廣隆は階段を降りようとすると、後ろから信幸が声をかけてきた。

廣隆

「俺は……まあ、ちよつと忘れ物を取りに。そういうお前は何をしてんだ？」

廣隆は不適な笑みを浮かべ、まるで新しい獲物を見つけたような顔をしている。

信幸

「俺は部活だ」

信幸は、お前と一緒にするなどでも言いたげな顔だ。

二人は並んで歩き、昇降口を指す。

杉並

「お、相沢と稲葉じゃないか」

なにやら重たげな鞄を持ちながら相沢達に近づいてきた。  
その後ろには圭一の姿が見える。

稲葉

「杉並、北川またよからぬことを企画してるので？」

稲葉は少々ウンザリした様子だ。

杉並

「フ、企画ではない。部活動だ」

杉並は不適な笑みを浮かべる。

「イツが悪巧みをした時の顔だ。

こういう時に関わると口クな目にあわない。

二人は杉並と北川との長い付き合いで直感的にそう感じた。

相沢

「そうか、がんばれよ」

杉並

「ああ」

ドリルや針金、鍵束、聴診器などが見え隠れしたが、軽くスルーして通り過ぎようとした。

圭一

「杉並、行くぞ」

何やら慌てた様子で、圭一は重たい鞄を持ち上げた。

杉並

「……今年は例年よりガードが固いな」

などと訳の分からぬことを呟く。

トドードードード

相沢と稻葉は音のする方を見ると、こちらに向かって風紀委員が走つてくるのが見える。

その先頭には勿論、音夢や美春の姿もあった。

杉並

「予想より少し早かつたな」

またも意味深な発言をした。

二人は未だこの状況を理解出来ずにいたが、このままここに居たら面倒なことに巻き込まれるということは火を見るより明らかだ。

音夢

「そこの三人、おとなしく捕まりなさい！！」

相沢は『三人？』と思い周りを見渡す。

杉並、北川、稻葉……

相沢

なるほど、この三人か

しかし、相沢の考えは的外れだといつては罰付かされる。

美春

「杉並先輩、北川先輩、相沢先輩おとなしくお繩につくです！」

美春を始め、音夢やその他の風紀委員が相沢達三人に向かってきた。

廣隆

「…………ひとまづ逃げたほうが良さそうだ……な？」

相沢の隣にいた信幸に声をかけたが、案の定といふか当然のよつこ  
圭一や杉並と共に逃げ出していた。

廣隆もその後に続く。

廣隆

「なんで俺も巻き込まれなきゃならないんだ？」

走りながら廣隆は叫んだ。

信幸

「口頃の行いが悪いからである」

信幸はキートン山田風に突っ込む。

何故キートン山田風に突っ込むんだ！と言いたかったが、今はそん  
なことを言つてはいる場合じゃないということを思い出し、廣隆はそ  
の言葉を飲み込み、全速力で走った。

廣隆

「ハアハア……な……何で俺達も巻き込まれなきやならないんだ……」

「…」

廣隆は息絶え絶えに言つた。

信幸  
「ハアハア……さあな……」

信幸も息絶え絶えに言つた。

その後一人は全速力で走り、体育館裏まで逃げてきたのだ。  
気がつくと杉並と圭一の二人とはいつの間にか、はぐれていた。  
まあ、関わると口クな目に遭わないので、自ら進んで関わる気はないのだが。

信幸

「アイツら何やつてたんだ？」「…」

信幸はドリルや針金等が入つていた鞄を思いだし、ふと疑問に思つた。

廣隆

「テスト勉強なんじやないか……」

意味深なことを呟く。

当然、信幸には理解不能だ。

廣隆は一昨日、音夢から聞かされた話しを思い出す。

音夢の話しへは、期末テストや中間テスト、抜き打ちテストをやるときに毎年必ず問題用紙を盗み、テストの問題を掲示板に貼り付ける不逞な輩（非公式新聞部の事なのだが）がいるとの事。

信幸

「そうか……大変だな風紀委員も」

信幸は何かを悟り、これ以上追求はしてこなかつた。

信幸

「まあ、それはいいとして、なんか食いにいかないか？」

廣隆は今何時だらうと思い、ポケットにしまつっていた携帯を取り出しディスプレイに表示されている時間を確認すると、時刻は12時を過ぎていた。

廣隆

「そうだな、いつもの所に行くか？」

信幸は黙つて頷く。

廣隆の言う『いつもの所』とは商店街にある牛丼屋のことだ、純一や杉並達とよく行く場所だ。

廣隆が私服のため正門から出るのには多少抵抗があり、二人は体育馆裏を通り、そのまま桜公園に出ることにした。

廣隆は隅つこのほうに目立たないように歩く。  
と言つても、こんなジメジメした体育馆裏には滅多に人は来ないと  
は思つが……。

しかし、信幸の考えは的外れの結果となつた。

日陰に咲いていた草の前で銀髪の女の子がしゃがみ込んでいた。

信幸は何をやつてるんだろうと思い、女の子の方に近寄つていつた

が、女の子は一人に全く気付かず、しゃがみ込んでいる。

廣隆

「何してるんだ？」

信幸の隣にいた廣隆が訊いた。

女の子は後ろを振り返る。  
彼女は輝く銀髪に、黒い手袋をはめ、その手には人形が握られていた。

リボンを見ると美春と同じ色で、一年生だといふことがわかる。

信幸

「どうしたんだ？こんなところで」

信幸が訊いたが、女の子は無音だ。  
無口で、何を考へてゐるのかわからない。

この手の女の子は廣隆は最も苦手なタイプだ。  
と、一人が戸惑つてると女の子は、はめていた黒い手袋を外した。

「『めんよ、アリスは戸惑つてるだけさ』

どこからか声が聞こえた。

二人は辺りを見渡すが、どこにも人の気配はしない。

「僕はここだよ」

二人は女の方を見る。

だが、女の子は一言もしゃべつてはいなかつた。

廣隆はまさかと思い、人形に問いかけた。

廣隆

「まさか…お前がしゃべったのか？」

「さうだよ。僕はアリスの思つてこむことを代わりにしゃべっているのを」「

二人は流石に信じられない、というような顔をしている。

普通に考えれば人形がしゃべるなんてことはゲームや漫画の中の話だ現実にはありえない。

おそらくというか、絶対というか、彼女が腹話術で話しているに違いない。

「腹話術じゃないよ。本当に僕が話しているんだ」

まるで一人の考え方を見透かしているかのようだ。

廣隆

「それで君の名前は？」

廣隆は腹話術かどうかなんてどうでもよくなつた。

信幸は時々、あまり深く考えない廣隆の性格が羨ましくなる。

ピロス

「僕の名前はピロス」

人形が自己紹介をした。

信幸は女の子に問いかける。

信幸

「君の名前は？」

アリス

「アリス…月城アリス…」

女の子は恐る恐る答えた。

信幸

「何してたんだ?こんな所にしゃがみ込んで」

信幸はアリスの後ろに視線を移す。

そこには、草が生え、ジョウロとスコップが置いてあった。草の手入れをしていたことが手に取るようわかる。

廣隆

「草?」

ピロス

「これは草じゃないよ、アリスが植えた花だよ」

二人にはどう見ても花には見えず、草に見える。道端に生えていたら間違えて抜いてしまうだろう。

ピロス

「この花はアリスが一生懸命手入れをした花なんだ。潰したりしないでよ」

信幸

「ああ、そんなことしないよ」

信幸が答えると、アリスはホット胸を撫で下ろす。

廣隆はそのしぐさを見てよほど大切なものなんだな、と思った。

廣隆

「時々この草の様子を見に来ていいか?」

ピロス

「抜いたり、潰したりしない?」

信幸

「しないよ

アリスは信幸が答え終わると、草の前にしゃがみ込んだ。  
どうやら来ていいくつて言うことなんだろう。  
と二人は勝手に解釈し、体育館裏を後にした。

廣隆は朝日が覚めると、憂鬱な気分になつた。  
今日は曆先生が言つていた“テスト”があるからだ。

廣隆

「ハア……」

桜並木を一人歩きながら本日三回目のため息をつく。  
思い出さなければこんな気分にならなかつたものをと思つ。  
だが、どんなにそう思つても後の祭りだ。

眞子

「な～にしけた顔してんのよ」

廣隆

「眞子？お前一体いつからそこ？」

廣隆は驚きの声を上げた。

無理もない、さつきまで憂鬱になつていて周りのことまでも忘れられなかつたのだから。

眞子

「さつきからいたわよ……」

廣隆

「く……」

廣隆は鳩が豆鉄砲を喰らつたよつた顔だ。

記憶を呼び起しかねつとすが、憂鬱の元凶である“トスト”といつ三文字しか出でこない。

そんな廣隆を見て眞子はため息を漏らす。

眞子

「どうせ今日のテストのことでも考へていたんじゃなーの?..」

さすが廣隆のクラスメートだけあって、彼の考へてこる」とはお見通しだ。

廣隆

「いや……そんなこと……」

慌てて弁解するが、図星なのでこれ以上は言ひ返せなかつた

眞子

「少しば勉強してきたんでしょう?..」

廣隆

「……」

廣隆が無言になつたのを見ると、眞子は「へつ……嘘でしょ」と問う。

廣隆

「俺が勉強すると思つか?..」

と、意味もなく威張つて返した。

眞子

「威張つて言つたなーー！」

眞子の鉄拳が廣隆の腹部を襲う。

廣隆を始め、純一や杉並もこの鉄拳制裁を幾度となく受けたことある。

純一いわく、眞子の鉄拳は“歩く凶器”とのこと。

廣隆

「ぐはつ！」

廣隆はそのまま地面に悶々と倒れこんだ。

眞子

「呆れるわね、普通は予習べりごするもんでしょ！」

廣隆

「お……俺だつて……少しは勉強しようとしたわ……」

倒れた廣隆が悶えながら言ひ。

眞子

「えつ……じゃあ、何でやつてなこのよ？

廣隆は眞子にやられた腹部を押さえながら立ち上がる。

廣隆

「教科書を開いたら、急に眠くなつたんだ」

眞子

「……」

さすがの眞子もこれには返す言葉が見つからなかつた。

教室

純一

「ふあああ

」

純一の教室に入つてから発した一言は「おはよう」ではなく、大きな欠伸だつた。

工藤

「朝倉……朝はおはようだわ」

工藤は呆れ顔だ。

純一

「おひ工藤か……無茶言つなつて……」

音夢

「工藤君、おはよう」

純一とは打つて変わって元気な音夢が、後から教室に入つてきて挨拶した。

工藤

「音夢さん、おはよう」

工藤は爽やかに返した。

音夢は自分の席に座り、純一はとこつと寝ぼけ眼のまま席に座り、机に突っ伏した。

工藤

「何で眠そうな顔してるんだ?」

純一

「ああ……少しでもテスト勉強したほうがいいと思ってな……教科書を開いたら寝ちまつた……」

工藤

「まつ……そんなことだと思った」

工藤はため息混じりに突っ込んだ。

ガラガラ

教室のドアが開き、眞子と廣隆が入ってきた。

工藤

「水越さん、おはよう」

眞子

「おはよう」

眞子は工藤に軽く挨拶すると、自分の席についた。

廣隆

「よつ……工藤……」

元気な眞子とは正反対で、憂鬱な表情で廣隆が挨拶する。

工藤は

「さつきと似たような光景だな」と思ひながら、廣隆に話しかける。

工藤

「テスト勉強してきたか?」

廣隆

「ああ……一応な……」

廣隆は曖昧な答えをする。  
実際にはやううとして、教科書を開いたり急に眠くなつて寝てしまつたのだが。

眞子

「教科書開いてすぐ寝たらしいけど」

と眞子が付け足した。

工藤

「そんなことだらうと思った」

工藤は呆れ顔で答えた。

純一

「相沢もか」

純一は後ろの席の相沢に振り返る。

工藤

「似たもの同士だね」

またもや呆れ顔で突っ込む。

眞子

「ホント」

隣にいた眞子は同意した。

二人は返す言葉が見つからず、机に突っ伏した。

放課後

「純一、

「終わった……」

物理のテストも終わり、ホッと一息をつく。  
純一の隣を歩いているひろ廣隆も“テスト”という恐怖から開放され  
てほつと胸を撫で下ろす。

「廣隆、

「これでテスト勉強なんてせずに遊べる」

「工藤、

「お前と朝倉はいつもテスト勉強なんてしないだろ」

工藤は鋭い突込みを入れる。

確かに二人は勉強するようなタイプじゃない。

「廣隆、

「……」

廣隆は工藤の突込みにも反応せず校門を凝視している。

「純一、

「どうしたんだ？相沢」

「俺の目がいかれてるのかな……？校門の前にヤギが見える……」

「廣隆」

「何言つてるんだ？ そんなとこにヤギがいるわけ……」

純一と工藤も校門の前を見る。

廣隆の言つようにヤギの姿が一人にも見えた。

「工藤」

「……ヤギだ……」

なぜか校門の前にヤギの姿が見え、女の子がヤギと格闘していた。

「やーめーーー食べないでー……」

「廣隆」

「助けたほうがよさそうだな」

三人は校門の前に駆け寄る。

「十三枚目は許してー……」

ヤギは女の子の事を無視して紙をむしゃむしゃ食べる。食べ終わると、地面に落ちていた別の紙を食べ始める。

「最後のページだけは食べないでー、私の汗と涙とその他いろいろな物の結晶が……」

ひとしきり食べ終わるとヤギは一鳴きして、どこかに消えていった。

三人は落ちていた原稿用紙みたいなものをを集め女の子に手渡した。

「工藤」

「これ君のだよね？」

「はい…、ありがとうございます……」

「工藤」

「大丈夫？」

地面にへたり込んでいる女の子に声をかけた。

「大丈夫です……」

女の子は顔を上げて力なく答えた。

「廣隆」

「大事なものだつたのか？」

「はい…大事なげん…げふん。書類で……」

「純一」

「直せないのか？」

「いえ…徹夜すれば……」

「工藤」

「徹夜？」

「今日は6時間ぐらい寝れると思ったのに……」

＜廣隆＞

「もつとちゃんと寝たまつがいい」

女の子はハッと気が付く、慌てて口を開けます。

「今の聞いえましたか？」

＜廣隆＞

「ばつぱつ

「あの……えっと……何でもないです……」

＜工藤＞

「僕達でよければ直すの手伝つよ

「本当にですか……あつがといひやれこます」

女の子はパッと表情が明るくなり、深々と何回も頭を下げる。

＜廣隆＞

「そついえば、血口紹介がまだだつたな、俺は三年一組の相沢廣隆

だ

リボンの色を見ると三年だということが解るが、名前と何組かまで  
は解らない。

＜工藤＞

「同じく一組の工藤叶」

^\\_純一^\_

「さらに同じく一組の朝倉純一」

「三組の彩珠です。彩珠ななこ」

三人は原稿用紙のことが気になつたが、深く突つ込まないことにした。

「杉並」

「よつ、朝倉」

純一が教室に入ると、杉並が声をかけた。

「純一」

「何だ杉並か……」

「杉並」

「何だとは随分冷たいな朝倉よ」

悪友の杉並を無視して自分の席に座る。

「杉並」

「今朝方職員室で重要な情報を入手してきたんだが……」

「廣隆」

「へー、どんな情報なんだ?」

廣隆が純一の席に近づいてきた。

「杉並」

「実はな、一組と二組に転校生がやつてくるらしいんだが

「純一」

「転校生?」

「廣隆」

「どんなヤツなんだ？」

純一とは逆に興味津々の廣隆が訊くと、杉並は待つてましたと言わんばかりの顔をする。

「杉並」

「なんでも一組は帰国子女らしい。三組は大和撫子タイプだそうだ」

その頃三組では

担任の先生が転校生の女の子と教室に入ってきた。

いつもと同じ一日の始まり。

普通の学校の、普通の教室の、普通のH.R.。ただ一つ違っていたのは……

「みんなに新しいクラスメートを紹介する

静かだった教室が一斉にざわめく。好奇心と期待の視線が、教壇に集中した。

教壇の前に『新しいクラスメート』なる者が立つ。どこか古風な、おとなしい感じのする女の子だった。中々の美少女だ。

信幸

「結構可愛い子じゃないか？」

俊樹の隣の席に座っていた信幸は椅子を近づけ、小声で話しかけた。

俊樹

「そうだな……」

俊樹は興味なさそうに言つた。

女の子は恭しく頭を下げ、自分の名前を名乗った。  
胡ノ宮環このみやたまきという、いかにも？和風といった名前だ。

自己紹介が終わると、環は辺りをキョロキョロと見回し始めた。

「胡ノ宮どつした？」

環

「あの……相楽様は……？」

担任の先生が俊樹の方を見る。それにあわせて、環も俊樹の方を見た。

環は俊樹から目を離さない。クラス中の視線が自然と俊樹に集中する。

特に俊樹の隣の席に座っている信幸は彼を凝視している。

「相楽とは知り合いだつたのか？」

環

「はい、あの……私、相楽様の許婚なんです」

俊樹

「は？？？？」

教室を衝撃が駆け抜けた。

一斉にクラス中がざよめく。

信幸

「お前も隅に置けないな俊樹」

俊樹

「……いや、俺はその子のことも、許婚の話も何も知らないんだ」

教室では、突然の許婚宣言に誰もが驚き、ヒソヒソと会話している。  
「詳しいことは休み時間に確かめるんだな。じゃ授業を始める。胡ノ宮、席について」

環

「はい」

なめるように見つめるクラスメート達の視線の中を環は歩いていき、  
教室の一番後ろの席へと歩いていった。

杉並

「よし、噂の帰国子女とやらを見に行こう」

一時間目の講師が教室を去ったのと同時に、杉並が朝倉の席に寄つてきた。

純一

「は？」

音夢

「え？」

なんだか寄つてきたパート2も、純一の鏡ののよつことじぼけた表情を浮かべる。

杉並

「は つて、何を驚いているんだ朝倉兄妹？」

音夢

「いえ……杉並君が、そういうミーハーなイベントに興味を持つているなんて知らなかつたから」

音夢が取り繕うように微笑む。

杉並

「なんだミーハーつてのは？ 売れない芸人コンビか？」

杉並はボケて返してきた。

純一

「そのボケにはつづこんでやらんが、珍しいを通り越してゐるな

転入生が可愛い女の子と聞いて男子が動き出すのは田に見えていたが、杉並だけは以外だった。

杉並

「いやいや……この時期に転入してくるなんて、何か陰謀の匂いがするだらうが。それに帰国子女というのはラスボスっぽい。つまり未知だ……」

音夢

「……はあ」

音夢はため息をつき呆れたような表情を浮かべる。

純一

「まあ、お前はまづ自分を研究しきくしたまつがいいと思つが……陰謀つて何をするんだ?」

どうやつたら、こんな学園で陰謀を張り巡らせられるんだろうか?

と、純一は考え及んだが唯一出来そうなヤツが田の前にいる事を思い出した。

杉並

「ん? テストでオレをTOPの座から落としたり、購買のパンを独り占めしたり、実は誰かのメイドさんだつたり

純一

「……最後のだけは切実だな。特に料理」

純一は吐き捨てるに杉並の隣にいた音夢は引き攣つたような表情を浮かべる。

音夢

「兄さん……何か含みがある発言が耳に残りましたけど?」

純一

「いや、別に」

ただ単に、朝倉家の食生活が絶望的だなんて一言も含んでいないし、悟られてはいけない。

純一

「で、お前はどうしたんだ音夢?」

杉並を無視したくて、投げやり的に話をふる。

音夢

「あ、いえ……なんだか先程から嫌な雰囲気を感じるといつのか…

…」

純一

「電波の受信が良くないんじゃないか。それなら屋上に行つたほうがいいぞ」

そういうと純一は頭上の触覚を指差す。

音夢

「「これはトレビのアントナじやあつませんー。」

杉並

「寝癖 ぐつー?」

鼻つ柱を押さえて杉並がうづくまる。

音夢の神速の裏拳が見事に決まつたからだ。

純一

「バカだな……女性の髪は命よりも大切だと言ひのこ

音夢

「兄さんがそれを言ひますか」

頭の触覚を撫でながら音夢が小声で睨む。  
と、杉並が机に手をついて立ち上がる。

音夢

「どうなさいたの杉並君?」

杉並

「くつ……やはつむ前の周囲ひま时空の断層が展開してこむのか?」

純一

「んなわけないだろ?が、それはヤレヒコの悪魔が……ん?」

純一が言つ終える前に廊下から猫のよつな鳴き声が聞こえてきた。

音夢

「なに?」

# 「猫か？」 杉並

なんだか廊下がガヤガヤと騒がしい。

純

音  
樂

「なんだろう、あの人だかり？」

音夢の指差した先には、主に女子を中心とした嵐が生じている。

「ういや、わわー？ 引っ張るなーーー！」

嵐の中心に女の子がいるみたいだが、背が低すぎるので、突き上げられた手が辛うじて見え隠れするだけだった。

杉並

# 「あれが噂の転入生かな？」

純

「どうけど……凄い人気だな」

純一

「ん? 何かどつかで聞いた事があるよ'つな声だな」

音夢

「あれ、兄さんも?」

眉を寄せて、音夢も小首を傾げて考え込んでいる。

純一

「何だね?……」Jの聞くと反射的に逃げたくなる顔は……」

音夢

「何だね? これ

杉並

「おい、一人共ボサツとしてると巻き込まれるわ」

杉並の声に反応して教室に非難しよ'とした時、ふと人垣の中に懐かしい小動物を見た気がした。

純一

「え?…… わくらんぼッ! ?」

「お兄ちやん! ?」

波をかきわけて、ひょっこりと見知った顔が飛び出してきた。

わくらんぼ、そう呼ばれた少女の名は“芳乃わくら”。

6年前まで朝倉家の隣に住んでいたが、突然アメリカに引っ越した子で、純一や音夢の幼なじみだ。

せくら  
ひ

「やつぱつ、お兄ちやんた～」

ぱつ、と風を切る音でも立てやつた勢いで、せくらが飛び込んでくる。

ビシッ ！

せくら  
ひ

「……痛い」

飛び込んできたせくらを押しはじめるよし、その額に音夢の左手が押さえ付けた。

杉並

「見事なカウンターだ」

称賛する杉並。

一方、見事にカウンターを入れた音夢はとこつと、

音夢

「おほほほほ……はあ」

わけの解らない笑い声を上げて、ため息をつく。

せくら  
ひ

「痛いよ音夢ちやん」

音夢

「ああ、『めん』『めん』、なんだか身体が勝手に……」

純一

「いや、待て」

音夢を押しのけて前に出る。

純一

「お前、本当にさくらんぼなのか！？妹とかじやなくて」

純一

「あ、懐かしいねその呼び方」

紛れもなく、有り得ないことに、さくらんぼの大きさは、別れた6年前のままだった。

純一

「この未知なる生物は知り合いか朝倉兄妹？」

一人だけマイペースだった。

純一

「お、俺は口リコンじやないぞ杉並」

パニクつた純一が否定する。

無理もない、6年前の姿のままで幼なじみにあえたのだから。

純一

「兄さん現実逃避しないで。間違いなくさくらんちゃんだよ」

純一 同様、パークる音夢。

純一

「いや、待て音夢ー。」くらなんでも同じ年には見えないぞコレはー。」

『コレ』と差し出した指が、頭上の虚空を指して所在をなくす。体裁を整える意味を含めて、その手をポン、とやくらの頭の上に置く。

さくら

「人の身体的な特徴でけなすの嫌い……でも、お兄ちゃんは好き

ぎゅうつー、と腰というか太股にさくらが張り付く。

さくら

「ねえ、お兄ちゃん。まだ信じてくれないの?せっかく帰つてきたのに“おかえり”は?」

純一

「君もふざけるのは止せ。さくらの妹か親戚だりつー。」

さくら

「ボクはボクだよー」

純一

「証拠でもあるのか?」

さくら

「んーっと、……今は持つてないけど……あ、一人だけの秘密でね、昔お兄ちゃんが女の子のスカートをー」

ビシッ！

誘拐犯な気分で、やくらの口を塞ぐ。

純一

「……」

純一は恐る恐る音夢の方を振り返る。

音夢

「……」

杉並

「……」

音夢は殺氣を放ちながら純一を睨んでいた。

純一

「……あ……ボク、勉強しなきや」

カクカクと教室に戻りつとしたりで、ドアから眞子が顔を覗かせる。

眞子

「一体なんの騒ぎなの朝倉？」

純一

「わ

いきなり教室から眞子が出て来て驚いて言った一言だ。

眞子  
「輪わ  
?」

純一

「……若氣の至りなんだよ~ー。」

眞子

「知るか!」

ピシヤ、と教室のドアが閉められた。

純一  
「許婚？」

学食に来ていた純一達一行は六人席に座り、今朝方三三組での“許婚宣言”で話題は持ち切りだった。

信幸  
「ああ」

信幸は事の顛末を話し終えると、一同の表情を窺う。朝倉兄妹は驚きの表情を浮かべ、杉並は相変わらずマイペースだ。廣隆に到つては俊樹を羨ましげに見ていた。当事者の俊樹はといふと、興味なさげにうどんを一口啜る。俊樹にとって幸いだったのは、この場所に圭一がいないこと、ついとだ。

もし、圭一がいたら杉並と組み追及の手は緩めないだろつ。

純一

「あの子に見覚えないのか？」

俊樹

「無い」

素つ気なく返した。

廣隆

「実は俊樹が記憶を無くしてるとか」

俊樹

「俺の頭の中のハードディスクをフル回転させたが、検索結果該当ナシ」

杉並

「ふむ……//ステリーの臭いがするな。非公式新聞部の出番だな」等と訳の解らないことを呟き、ふと何かを思い出したように純一を見て、不適な笑みを浮かべる。  
まるで、ハンターが新しい獲物を見つけたような目だ。

杉並

「今朝の未知なる生物は知り合いか朝倉兄妹?」

信幸

「未知なる生物?」

杉並

「一組に転入した子だ。見た目からして未知なる生物でな……」

廣隆

「朝倉の知り合いか?」

廣隆は杉並の話を遮る。

純一

「まあな……アイツが本当のさくらんぼなら、直にわかるさ」

音夢

「どういった事?..」

純一

「……」

「さあ、さとひさんのスープを飲み干し、ため息をつく。

純一

「どうしてか、かくれんぼでアイツに勝てた試しがないんだ……あんな風に」

指差した食堂の入り口では、さくらが団体を引き連れ、キヨロキヨロと辺りを見渡していた。

さくら

「あっ、うひ、ボクはお兄ちゃんを探してるだけで、そんなのいらな うわわわわー！」

餌付け感覚なのか、さくらに食べ物をあげようと皿が寄り添つて渦を形成している。

純一

「……取り敢えず俺は消える」

そつこないと純一は顔も無く、まるで忍者のように食堂から姿を消した。

杉並

「では俺もそろそろ次の任務に移るか」

意味深な発言を残し食堂を後にした。

信幸

「だけど、ずっと俺達は俊樹と一緒にいるけど、そんな話、初めて聞いたぞ」

信幸の言つ“俺達”とは廣隆、要、圭一、信幸の四人の事だ。

俊樹

「だらうな、俺も初めてだ」

廣隆

「あのなあ」

信幸

「おい、俊樹」

俊樹

「え？」

信幸

「噂をすれば影……だ」

信幸は顎をしゃくって食堂の入口を示した。

廣隆達がゆつくりと信幸の示す方を振り向くと、ちゅうど入り口から話題の主であった環が入ってくるところだった。

不意にキヨロキヨロと辺りを見まわし始める。

音夢

「誰かを探しているのかな?」

信幸

「俊樹の事を探しているんじゃないのか?」

俊樹

「違うだろ」

俊樹は否定した。

食堂に入ってきた時に環と一度目があったのだ。彼女は食堂内を見渡せる位置までくると、環の様子を見ていると、なんだか切羽詰まつたような感じがする。

もし本当に俊樹を探しているなら、目があつた時真っ先にココに飛んでくるだろ。う。

それをしないといふこと、お田町では俊樹でな無いといふことになる。

俊樹がぼんやり見つめていると、彼女は目的のものを見つけたかのように立ち止まつた。

音夢

「あ、動きが止まつた」

そして次の瞬間

環は突然自分の制服に手をかけると、勢いよく脱ぎ捨てた。ふわりと制服が宙を舞い、その下から純白の着物と深紅の袴が現れる。

言い方を変えるなら巫女服姿の環が現れる。その様子を見ていた四人はといふと。

音夢

「……」

音夢は絶句し、

俊樹

「ぶつ ー?」

俊樹は食べていたうどんを噴き出し、

信幸

「えー……」

信幸は驚きの表情を浮かべ、

廣隆

「なつー……」

廣隆は驚きのあまり、スプーンをカレーの上に落としてしまった。

信幸

「あれって……」

廣隆

「神社の巫女さん……だよな?」

その通りだった。

背筋をピンと伸ばした環が、じつに訳かは解らないが……巫女装束で、しかもこの風見学園の食堂に立っている。

俊樹

「そりいえば家は神社だとか言つてたな……」

音夢

「でも、このシチューションには全く関係ないでしょ？」

信幸

「朝倉さん……制服の下にあんなかわばる服が着れるもんなの？」

音夢

「私に訊かないで、稻葉君」

「一体どこから取り出したのか、環の手には弓が握られ、矢をつがえたままキリキリと弦を引き絞っている。」

俊樹

「弓？これから狩りでもするのか？？」と、「どこから取り出したんだ？」

音夢

「だから私に訊かないで！」

食堂内にいる皆が彼女の想像外の行動に呆然してると、矢はヒュン！と音を立てて放たれ、近くにいた男子生徒の井を貫通し、見事に真っ二つに立ち割った。

廣隆

「テレビの口ケか？」

廣隆は思わず辺りを見回したが、勿論カメラなどどこにもなかった。

ドッキリでもないらしい。

食堂内はシンと静まり返っている。

その場にいた全員の視線が環に集まっているが、それは仕方ないだろつ。

彼女は時代劇か、格闘ゲームに出てくるヒロインのよう、巫女装束に「」を持った姿で立ち尽くしたままだ。

もつとも、一番驚いたのはいきなり矢で射られた男子生徒だろつ。

彼は真つ一いつになつた丼を、ぼーっと放心したように眺めていた。

環

「申し訳ありません、ちょっと手元が狂ってしまった……お騒がせしました」

環は深々と頭を下げた。

信幸

「手元が狂つた……ねえ」

信幸は訝しむ。

音夢

「思いつきり故意に見えたのは私だけ？」

俊樹

「同じ疑問を持つたやつは、この食堂の客と同数いるはずだ」

俊樹は環を見つめたまま答えた。

手元がどつ云々以前に、食堂の中で矢を放つ事事態が異常なのだ。

廣隆

「で、今何?」

俊樹

「俺に訊くな」

環

「あら、相楽様」

俊樹達に気付いたらしく、環は『矢を手にしたまま笑顔を浮かべて近寄ってくる。

その表情は、とても常軌を逸した行動を取つたばかりの人物とは思えなかつた。

俊樹

「よお、胡ノ宮」

環

「そちらの方は?」

環は廣隆と音夢に視線を移した。

まだ転校初日で、しかも別のクラスなのだから知らないのも無理はない。

俊樹

「一組の相沢廣隆と朝倉音夢さんだ」

音夢

「は……初めてまして、胡ノ宮さん」

何とか平静を保ちながら答えるが音夢の声はわずかに上擦つている。

そんな様子に気付いているのかないのか、環は平然としたままだ。

環

「先程は大変失礼を致しました。まさかあんな大騒ぎになるとは思いませんでした。親が決めた許婚という事でしたので、わたくしとしても気になります、本当にお騒がせしました」

につこりと微笑む環は、今の状況を全く氣にした様子がない。ならば、臆することはない。

彼女に訊きたいことがあった。

この際はつきりさせた方がいいだらう。

俊樹

「あのや……親が決めた許婚つてどういこと?俺は胡ノ宮は勿論、胡ノ宮の両親にも会つたことがないんだぜ」

環

「実はわたくしにもよく分からぬのです」

俊樹

「分からぬ?」

環

「わたくし……幼い頃の記憶を失つてゐるのです」

環はそう呟くより口に言つて、そつと手を伏せた。

彼女の説明によると、生い立ちは勿論の事、住んでいた場所や遊び相手のことなど、全て思い出せないらしい。

母親は環と朝倉の間には、深い絆があるのだと言つた。

俊樹

「つまり……どんな絆か分からぬいけど、俺と環には何か深い絆があり、それで許婚になつたと？」

環

「わたくしも母に尋ねたのですが、どういう意味か教えてくれませんでした。ただ、相楽様に会えればいざれ分かることだから……と」

だが実際にはこうして一人が会つても、何も分からぬい状況に变化はない。

環はこの学園で俊樹と共に一緒に過ごし、答を見つけたいのだと言つ。

環

「身勝手で掘みようのない話であることは承知していますが、どうかよろしくお願ひします」

俊樹

「まあ、よろしくな」

廣隆

「さてと、俺達お邪魔虫は退散しますか」

そういふと、廣隆は立ち上がる。

その後に続くよつに信幸と音夢も立ち上がり、食堂を後にした。

「彼女のことがどういってた？」

廣隆と共に桜並木を歩いていた信幸は唐突に訊いてきた。

「廣隆」

「彼女？ 何だ稻葉、彼女でも出来たか？」

廣隆が茶化すと、

「信幸」

「違う！ 転校生の胡ノ宮だよ胡ノ宮！」

と、つっこんできた。

「廣隆」

「胡ノ宮？ お前、まさか胡ノ宮の事が……」

「信幸」

「だから違うって……！」

廣隆の言葉を遮る。

「信幸」

「お前知つててワザとやつてたんだ？」

「廣隆」

「「」めん」「めん」

さすがにこれ以上茶化すのは無理と判断し、素直に 素直かどつかはわからないが 謝る。

〈廣隆〉

「で、胡ノ宮がどうかしか？」

〈信幸〉

「食堂の件なんだけどな……」

廣隆にも信幸の言いたいことは分かる。  
なぜあのような突拍子もない事をしでかしたのか。  
多分その事を訊いているのだろう。

〈廣隆〉

「何であんな事をしでかしたのかは分からないが、何か理由があつたんじゃないかな？」

信幸はキヨトンとした顔で廣隆に返す。

〈信幸〉

「ん？ 何のこじを言つてるんだ相沢？」

廣隆もキヨトンとした顔になる。  
確實に話が噛み合つてない。

次の瞬間、廣隆は予想外の事を聞く事になる。

〈信幸〉

「いや……俺が訊いてるのは、何で“巫女服”なんてかさばる物を

制服の下に着ていたのかという事と、ビビからあんな『矢を取り出したのかという事の一つなんだが……』

“どうやら信幸にとっては、奇怪な行動は一の次らしい。

＜廣隆＞

「さあな……だが、この世の中には理屈では説明がつかない事の一つや二つあるって事だ」

＜信幸＞

「そんな物はないよ、全部理屈で説明つくれ」

＜廣隆＞

「じゃあ訊くが、何でこの初音島の桜は一年中咲いてるんだ？」

信幸は廣隆の問いに答えられなかつた。

確かに、普通に考えれば一年中咲いている桜はおかしい。

信幸たちは今までそれが当たり前だと思っていたが、理屈では説明がつかない、不思議な桜だ。

あえて杉並の言葉を借りて言つなら、『未知の桜』だ。

＜信幸＞

「なるほど……確かに

信幸は認めるしかなかつた。

要

「許婚宣言ね……そんな事があつたのか

俊樹は昼に食堂で起きたことや、H.R.中に“許婚宣言”の事など経緯を話した。

要

「だが、そんな話初耳だぞ」

要はホットコーヒーを一口啜る。

俊樹は放課になると、要を喫茶店に連れだした。  
桜公園で話してもよかつたのだが、四月だといつても、まだ外は寒い。

そんなこんなで二人は喫茶店に来たのだ。

俊樹

「俺も初耳だ」

要

「ならなぜ俺に訊く?」

要の疑問は当然だろ?

許婚宣言を受けたのは、他でもない俊樹なのだ。

俊樹

「要なら何か知ってるかと思つて」

要

「俊樹が知らないのに俺が知るわけないだろ」

確かにその通りだ。

俊樹が知らない事を部外者である要が知るはずもない。

何故かは分からぬが、俊樹は不安に覆われた。

音夢は美春と一緒に昇降口を出ると、やくらが校門の前に佇んでいた。

音夢

「やくらひやん？」

音夢は不思議そうな顔でやくらを見る。

やくら

「あ、音夢ちやん」

振り返り、音夢を見る。

音夢の隣には純一がいると思つたからだ。  
しかし、その隣にいたのは純一ではなく、見知らぬ女の子だった。

音夢

「ここの娘は、天枷美春」

やくらの視線が美春に注がれた事に気付き、紹介した。

音夢

「美春、ここの娘は芳乃やくらひやん」

今度は隣にいた美春にやくらの事を紹介した。  
そんな美春はとつと、じーっとやくらの事を見ていて。  
やくらは美春より身長が低いため年上に見えないので、

音夢はそんなふうに思つたが、美春がいきなりさくらに抱き付いた。

美春

「芳乃センパイちつちやくて可愛いです」

さくら

「美春ちゃん、お肌すべすべ」

今度はさくらが美春の事を抱き付き返した。

音夢

「驚くほど一人とも波長がピッタリね…」

音夢は呟く。

さくらと音夢の家が隣りといつともあり三人は一緒に下校した。音夢、美春、さくらの三人は、桜並木を歩きながらさくらの過去を話した。

純一とさくらは従姉だといつひと、昔一緒に遊んだこと、そして、アメリカに行つたことを。

美春

「へー、芳乃センパイと朝倉センパイは従姉で幼なじみだったんですねー！」

美春は驚く。

無理もない、さくらの事は話したことはないのだから。

音夢

「どうして一人でアメリカから戻ってきたの？」

さくら

「お兄ちゃんとの約束をするためにな

桜を見ながら言った。

まるで、過去を懐かしんでいるかのよけだ。

美春

「約束つて何ですか？」

美春は興味津々だ。

さくら

「アメリカに行く前に、お兄ちゃんと二つの約束をしたんだ」

美春

「どんな内容なんですか？」

さくら

「一つは、必ず再会する」と。二つは困った時は必ず助けること。  
そして、三つは……」

さくらは二つの約束を口に出せなかつた。

美春

「何ですか？二つの約束つて」

さくら

「一やハハ……それ以上は、恥ずかしくてボクの口から言えないよ」

よ

「えへへ」美春がしかし笑いを上げる。

美春

「えへへ、教えてくださいよ」

美春は不満の声を上げたが、

さくら

「ダメダメ、これはお兄ちゃんとボクの秘密なんだから」

「うやうやしくは通用しないよつだ。」

そんな一人の後ろに、浮かない顔で音夢が歩いていた。

音夢

「秘密か……」

音夢はテーブルの上にノートを広げ、ポツリと呟く。

純一

「何が秘密なんだ？」

いつの間にか帰宅していた純一が顔を覗かせる。

音夢

「兄さん！ 一体いつ帰つて来たんですか？」

音夢は慌てふためく。

考え事をしていて、リビングにいるにも関わらず、純一が帰つて来

た事にも気付かなかつた。

純一

「今だ」

素つ氣なく返し、テーブルに広げてあつたノートを取る。純一が手に取つたノートは家計簿だつた。

純一

「まめだな……管理しなきやならないほど、つるには金はないんじやないか?」

音夢

「お金のあるなしに閑わらす、つけるものです

そつ言つて、家計簿を純一から奪い取る。

音夢

「つへん……もつ少し、節約しないとダメかなあ……お父さんたちにも悪いし」

冷蔵庫から牛乳を取り出す純一の耳に音夢の弦きが聞こえてくる。

純一

「別に気にする必要はないだらう。必要経費なんだし」

音夢

「やうだねえ……」

純一はソファーに座り、コップに入れた牛乳を一口飲む。

音夢

「やつぱり無駄遣いは控えないとい……自炊をするしかないのかな？」

音夢の呟きに純一の時間が止まる。

純一

「ちょっと待て音夢、食費より医療費に金がかかつたら本末転倒だろ」

音夢

「それどういう意味ですか？ 兄さん」

引き攣つたような笑みを浮かべながら、純一を睨む。

純一

「そのままの意味だ」

音夢

「それでは、兄さんのお小遣いを減らしましょ」

音夢は悪魔の様な笑みを浮かべ、純一をジト目で睨む。

純一

「ダメだ。絶対ダメ。俺が生きていけなくなる」

音夢

「大丈夫。食費の分まで減らしたりしないから」

純一

「 そういう問題か？」

音夢

「 そういう問題だと思いますけど」

純一

「 そういう問題……か？」

純一はガクッと頃垂れた。

音夢

「ハイ」

純一とは打つて変わって勝利の笑みを浮かべる。

夕食を食べ終えた純一は自室に戻ると、ベッドの上にやへりが座っていた。

^\\_純一^\\_

「さくら、どこから不法侵入したんだ?」

^\\_やへり^\\_

「普通に入ってきたよ」

^\\_純一^\\_

「玄関の鍵でも開いてたのか?」

そう言い終わると、家に帰つて来てからの自分の行動を思い出してみる。

帰つて来て居間に寄り、音夢のつけている家計簿を見て、その後に出前を頼んだ。

出前が来るまでは、自室に籠りっぱなしで、食事中は居間で済ましたし、その時やへりが入ってきたなら、いくらなんでも気付かないはずが無い。

^\\_純一^\\_

「だとしたら、いつ入つて来たんだろ?」

純一が考え込んでいたと、やへりは予想外の答えを返してきた。

^\\_やへり^\\_

「桜の木を伝つて窓から。ちゃんとノックもしたよ?」

ベッドの上の窓を指差しながら答えたさくらが、  
『どうだ、参ったか』とでも言つたげに見えたのは、純一の氣のせ  
いだらうか？

純一へ

「……それは全世界どこでも不法侵入だと想つた

さくらへ

「お兄ちゃんが良いつて言つたんだよ」

純一へ

「は？……ああ、それは子供の頃の話しだろ？が

椅子に腰掛けてため息をつく。

さくらの家の庭から純一の部屋の窓まで桜の木が伸びていて、そこ  
からさくらが遊びに来ていた。

夜中までこつそりと遊んでいた事も、何度かあった。

さくらへ

「あ～あ、これで同じクラスだったら最高だったのにな

純一へ

「……そんな恐ろしい事を平然と言つた

さくらへ

「うひや？恐ろじ？？」

純一へ

「何でも無い、じつのは話だ。それより、お前は何しに来たんだ？」

『あんな所から』と夜桜が浮かぶ窓を示す。

へそへひへ

「せうそつ帰つてきた挨拶だよ

純一へ

「学校で散々騒いだだらうが……」

へそへひへ

「ふう！まだ、ちゃんと引越しの挨拶もしてなかつたんだもん

へそへひへは膝をつこへ軽くお辞儀をする。

へそへひへ

「とつあえず、これからも宜しくお願ひしますと申つてお

後は玄関から入つて来て、挨拶出来れば問題はないだらう。

へそへひへ

「えへへ、やうやうお兄ちゃん、今でもあそこの鍵直さんこいでいてくれたんだね。あの窓、六年前から壊れっぱなし」

音夢が無用心だから何度も直せつて言つてきたが、なぜか純一は直す気になれなかつた。

純一へ

「……面倒だつただけだろ」

純一は呟いたが、そくらの耳に届いたかどりかは分からない。

^さくら^

「ね、今でもアレ出来る?」

さくらが「パ-パと手を閉じたり開いたりした。

^純一^

「これが?」

純一は左手を軽く握り締め、適当な和菓子 饅頭を思い浮かべる。

すると、何も無かつた左手に重さが生まれる。

他人の夢を見せられることと合わせて純一が持つ、無から和菓子を

生み出す不思議な力。

あんまりにも馬鹿らしく、音夢にすらこの力を秘密にしているのだが、さくらだけはこの力の事を知っていた。

^純一^

「ま、アン」「多めだ」

^さくら^

「わ、と」

空中に放った饅頭を、慌ててさくらがキャッチする。

コンコン

部屋がノックされ、中に入ってきたのは勿論音夢だ。

^音夢^

「兄さん……えつ、さくらちゃん?」

当然部屋の中には純一しかいないと思っていた音夢が、ポカソントルーハリと純一を交互に見比べる。

＼音夢／

「ねべりやん、何もつてないの？」

未だに状況が分かっていない音夢。

＼ねべり／

「引越しの挨拶だよ。今日はもう遅いし帰る」とさすがの

ねべりはベッドから立ち上がり窓を開けた。

しかし、ねべりは部屋から出る様子は無く、振り返り純一と顔を近づける。

ずのと次の瞬間、純一とねべりの唇が重なり合つた。

＼ねべり／

「じあね、お兄ちゃん、音夢ちゃん、おやすみなさい」

さつ音に残して、窓から出で行った。

臉に染み込む朝田に刺激され、純一は田覚めた。

♪音夢♪

「おはよひ」やれこめす、お兄ちゃん」

田を開けると、なぜか音夢が隣で添い寝をしていた。

♪純一♪

「何してんだ？」

♪音夢♪

「何してんだ……いつも一緒に寝てんだぞ？」

♪純一♪

「いつも一緒に……寝てる。」

♪音夢♪

「ねえ、お兄ちゃん、いつも朝の挨拶……して

そう言つて、音夢が臉を閉じる。

♪純一♪

あれ、前にも似たような事があつたよつな……

何かを思い出した純一は、臉を閉じている音夢をチラシと見る。

♪純一♪

「 そうか、これは夢だ……ならば

音夢は妹だとわかつてはいるが、欲望には勝てなかつた。

^\ 純一 <

「 いただきま~」

^\ 音夢 <

「 はこ、いりやひわせ~。」

「 ハスツ

固い口付けと共に、またしても夢は終わつた。

^\ 純一 <

「 痛てえ……~。」

純一が田を覚ますと、顔の上には、毎度お馴染みの国語辞典が乗つ  
かつていた。

それを退かすと、不機嫌顔の音夢の姿があつた。

^\ 音夢 <

「 早く起きて下を~、兄さん」

^\ 純一 <

「 なんでそんな不機嫌そうな顔をしてるんだよ?」

^\ 音夢 <

「 どうせ、昨日の夜の続きの夢でも見てたんでしょ」

音夢は膨れつ面で言つた。

^\\_ 純一 ^

「違ひ、 そんなじやない」

否定したが音夢の追及の手は緩まない。

^\\_ 音夢 ^

「では、 どんな夢を見ていたんですか？」

^\\_ 純一 ^

「.....」

純一は口^もつた。

例え血が繋がつてないとは言え、 音夢は純一の妹だ。  
夢の中でキスをしたとは、 口が裂けても言えない。

^\\_ 音夢 ^

「言えなこといつ事は、 やつぱり変な夢だつたんですね」

^\\_ 純一 ^

「違ひ。 こや.....何とは言えないが、 お前が想像してこるのは違  
うひ。 いかにも夢とこりの現実に起きた事を試写選択し、  
記憶に詰めるための情報管理システム.....」

^\\_ 音夢 ^

「それはへ理屈と書つモノです」

言つ終えると、 部屋から出て行つた。

純一が教室に入つて初めに声をかけてきたのは杉並だった。

› 杉並 <

「おはよう、朝倉」

› 杉並 <

「なんだ杉並か……」

› 杉並 <

「どうしたんだ？朝倉、浮かない顔をして」

› 純一 <

「なんでもない……」

杉並は訝しげに純一を見た。

› 廣隆 <

「姫君と喧嘩でもしたか？」

廣隆が一人の話の間に入つて來た。

純一はチラッと音夢を見る。どうやら、音夢は不機嫌な様子だ。

› 眞子 <

「朝倉、あんた音夢に何したの！」

音夢の事を心配した眞子が、廣隆・杉並の連合軍に加勢した。

「朝倉」

「はあ……お前ら……揃いも揃つて」

純一がぼやくと、新たな標的見つけた杉並が茶化す。

「杉並」

「水越、人の家庭事情に口出しそるのはヤボと言つものだぞ」

純一は『お前が言つた』と、突っ込もうとしたがかったらかつたので、胸に留めておく事にした。

「杉並」

「まあ……朝倉個人に興味があるなら、話しさ別だがな」

不敵な笑みを浮かべた杉並に、眞子は右ストレートを放つたが杉並は難なくそれを避ける。

「杉並」

「フッ……お前とは何年付き合つてると思つてるんだ? 口より先に手が出るお前の行動など、手に取るよつに分かる」

当然、この程度で引く眞子ではない。

一発、二発、三発と無数の怒りの鉄拳を放つが、杉並はそれを全部避けた。

純一は呆れ顔で一人を眺め、廣隆は巻き込まれないように避難した。かくして廣隆・杉並・眞子の連合軍VS純一の戦いは眞子と杉並の仲間割れという不本意な まあ、ある程度は予測していた 結果で幕を閉じた。

## 昼休み

純一は学食に行こうと立ち上がり、財布を探した。  
が、どこにも見当たらない。

右ポケットを探し、左ポケットを探す。  
ポケットに無い事を確認すると、鞄の中を探した。

› 純一 <  
「財布忘れた……」

純一はガックリと肩を落とした。  
純一の横を音夢が通り過ぎようとする。

› 純一 <

「音夢、昼メシ一緒に食おう……といつか奢ってくれ

音夢はチラッと振り返り、素っ気なく答えた。

› 音夢 <

「生憎、私も持ち合わせがありませんので」

不機嫌な様子で教室を出て行く。

› 純一 <

「あの妙によそよそしい態度、馬鹿丁寧な敬語、『裏音夢』出現だ  
な……」

純一は呟く。

『裏音夢』とは純一がひそかに『裏モード』と呼んでいた時の表情だ。

外面のよこ音夢は、学園内では優等生とこいつで通っているが、純一にこの『裏モード』に対する時は、いつも怒っている時なのである。

頭をポリポリと搔き、かつたるわたり音夢の後を追って掛けた。

純一

「ちよつと待て、音夢」

純一が声をかけるが、足を止める様子も無い。

純一

「何を怒つているんだよ？」

音夢

「別に、怒つてなんていません」

素っ気なく返すが、眉間にシワを寄せているのが見える。

純一

「今朝の夢の事を怒つてゐるのか？それだったら……」

音夢

「違います。だって兄さん、昨日もへりひやっと……」

へりひや音夢が怒つていて、今朝の夢の事では無い、昨日のところへりひや音夢をした事を怒つていていた。

^純一 ^

「いや……あれば深い意味は無いんじゃないのか? さくらはアメリカ暮しが長かつたし……それに向こうでは挨拶みたいなモンだろ」

^さくら ^

「そんな事はないよ」

必死で弁解した純一だったが、音夢の怒りの元凶であるさくらがそれを否定する。

そればかりか、純一を窮地に追い込む。

^さくら ^

「それに唇は初めてだし」

純一と音夢が絶句する。

^純一 ^

「それって……『ひめ』……」

「冗談だと言つ事を願いながら聞つ純一。しかし、それとも打ち砕く事に。

^さくら ^

「責任取つてもひつて事」

^純一 ^

「陰謀だ! あの時は回避する術が無かった……」

^さくら ^

「そんな事よりお兄ちゃん、一緒にお腹食べよつ お兄ちゃんの大

好物のウーマンおにぎりを作ってきたんだよ

『まひ』と両手を差し出すやへりの手には、弁当箱が一つ握られていた。

› 純一 <

「この一大事をウーマンで片付けるな

› 音夢 <

「よかったですね兄さん。お昼ご飯にありつけて

言い捨てると言夢は学食へと向かっていった。

純一は追い掛けようとしたが、さくらが腕にしがみついて追い掛けの事が出来ず、見送る事しか出来なかつた。

俊樹は空を仰ぎながら「一ヒーを一口啜る。

その姿はまるで縁側に腰掛け、お茶を啜る老人のようだ。

›要く

「俊樹、お前その姿……ジジ臭いぞ」

要は突っ込んだが、どうやら聞こえてないらしい。

まあ、それは仕方のない事だつた。

いつも昼休みになると、この二人の回りには女子生徒が集まつてくる。俊樹は主に下級生に慕われており、頼れるお兄さんといった感じだろう。

信幸はとすると、年上に可愛がられ、年上の人から見れば信幸は可愛い弟みたに見えるのだろう。

そのせいもあり、大概昼休みは静かに食べる事が出来ないでいる。二人は久しぶりの長閑な午後の一時を満喫しているのだ。

›信幸く

「圭一も誘えればよかつたんじゃないか？」

›要く

「誘おうとしたんだが……杉並と一緒に食つたんで止めた」

一人は納得したように頷いた。

圭一・杉並の問題児一人と関わろうとするヤツはいないだろう。若干一名を除いては。

›信幸く

「いい天気だな……このまま昼寝でもしたいくらいだ……」

信幸が呟いた

その時

長閑な午後の一時は脆くも崩れ去った。

体育館裏に近づく騒がしい声。

その正体は俊樹・信幸を慕う女子生徒の声だ。

二人はガツクリと頃垂れ、新たに静かな場所を探し出すべくその場を後にした。

一方、一人体育館裏に残された要は、あの一人の境遇を大変そうだなど他人事のように思い、横になり昼寝を始めたのだった。

つづく

時を同じくして、廣隆と工藤は校門前を歩いていた。

› 工藤 <

「たまには外で昼飯を食べるのも、なかなかオツなものだな」

› 廣隆 <

「だろ？少し前にウマイ定食屋を見つけて、いつか紹介したいと思ってたんだ」

時々こうして学食ではなく外で昼飯を食べる事がある。

学校では特に外出を禁じていないので何人かはそういう昼休みを過ごしている。

廣隆と工藤は、並木道へ足を向けると、人形を持った女子生徒が歩いてくるのが見えた。

› 廣隆 <

「よつ、月城」

アリスが一人の前までやってきて、ペコリと頭を下げる。

› 廣隆 <

「どうしたんだ？遅刻か？」

› 工藤 <

「おいおい、相沢じゃないんだから……」

間髪入れず工藤が突っ込む。

> 廣隆 <

「オレだつてこんなに遅刻はしないつての、それに、こんな時間に学校に来るぐらいだつたらサボつてるつて」

廣隆はなぜか自信満々に言つた。

> 工藤 <

「自信満々に言つな」

工藤は冷めた突つ込みを入れる。

> アリス <

「……遅刻です」

意外な答えが帰つて来くる。

> 廣隆 <

「……ホントに遅刻だつたのか」

> アリス <

「……用事があつて」

> 廣隆 <

「用事?」

アリスは頷き、鞄の中からビニール袋を取り出しそれを廣隆達に見せた。

> 廣隆 <

「肥料？……ああ、あの草の」

正確に言つなら『花』なのだが。

藤

「何だ？あの草つて？」

アリスが袋を收め、廣隆に視線を向けた。

廣隆

いや……別になんでもない

廣隆がそうしたると、アリスは安堵の表情を見せる。

工藤

「この子の大事な秘密ってことか」

「まあ、そんな所だ」

藤

「それなら深く聞くのは止めよう」

>アリス<

先輩、サヨナラ

アリスはそう言つて、もう一度頭を下げる、スタスタと学校に入つていつた。

工藤

「遅刻をしてでも、守りたい何かがあるってことが……」

↗ 廣隆 ←

「ああ……」

↗ 仁藤 ←

「相沢も、そいつはカッコイイ理由で遅刻をするなら、いいんだろ  
うけどな」

↗ 廣隆 ←

「大きなお世話だ」

そんな時、一人の女の子が田の前をフラフラと歩いていた。

↗ 萌 ←

「すや～～～」

よたよたと千鳥足で歩きながら、校門の壁にぶつかり、そのままズ  
ルズルと地面にずり落ちる。

↗ 萌 ←

「ムニャムニャ……シャツキリボンといいお味……」

萌はそのまま気持ちよさで飛びに落ちた。

↗ 廣隆 ←

「…………」つづいて、遅刻の仕方より、ナンボかマシだと思つんだが

↗ 仁藤 ←

「それは認めてやるわ」

学校が終わり、桜並木を躊躇<sup>ちちよ</sup>しつに歩いている姿があった。

純一だ。

純一へ

帰るのが億劫<sup>おっくう</sup>だ……

その理由は他でもない音夢だ。

まだ音夢の怒りは治まつていない。『歩いても歩いても家にたどり着けなければいい』と何度も思つた事か。

しかし、その都度『そんな非現実的な事あるわけない』と苦笑した。

純一は歩きながら考え方をしていた。

眞子や相沢達には言いたい事は言えるのだが、音夢にだけは言えないのはなぜだろうと。

しかし、何度も考へても思ひ浮かんだのは『音夢に特別な感情があるからなのでは』と言う事だ。

純一は首を振り、それを否定した。

血は繋がっていないとはいえ音夢は義妹なのだ。

そんな事あるはずがない。

純一が何かに気付き、顔を上げると家の前に着いていた。

純一へ

「着いちまつた……」

とぼやいた。

学校に行く時は遠く感じるのだが、今はなぜか物凄く近く感じられる。

純一は深呼吸をすると、覚悟を決めて家の中に入つていった。

^\\_純一\\_v

「ただいま……」

玄関に音夢の靴があり、既に帰つてきている事がわかる。  
しかし、返事が無い。

どうやら部屋に籠つているらしい。

制服から着替え終えた純一が次にした事は、晩飯の準備だ。  
と言つても作るのでは無く、店屋物の注文だ。

注文してから十数分が過ぎた頃だらうか、店屋物が届き、音夢に声をかけた。

^\\_純一\\_v

「音夢ーー、晩飯だぞ」

^\\_音夢\\_v

「……」

しかし、音夢は反応しない。

未だ怒りが鎮まらないのだろう。  
籠城の構えを見せた。

しかし、

ぐづづづ……

腹の虫が鳴る。

人はどんな時でも腹は減るもの。

兵糧がなければ籠城は成り立たない。

音夢は渋々部屋を出て、階段を降り、居間に入った。

^\ 純一 <

「今日の晩飯は豪勢にウナギだ。俺の奢りだ」

^\ 音夢 <

「……」

音夢はそれを軽くスルーして、キッチンの戸棚に仕舞つてあつた力  
ツップ麺を取り出した。

^\ 純一 <

「なんだよそれ……感じ悪い」

^\ 音夢 <

「じめんなさい、兄さん。今日はウナギの気分じゃないの……」

^\ 純一 <

「じゃあ、今日は力ツップ麺の気分なのか?」

純一はムツとして返す。  
だが音夢は反応しない。

>純一 <

「はあ……かつたりい……」

純一は呟いた。

>音夢 <

「かつたるくて、結構です」

さらにも音夢も呟いた。

だが少しして言い過ぎたと後悔したが、音夢にも意地がある。ここまで来たからには、後に引けなかつた。

つづく

純一は何もせず、ただボケーとテレビを見ていた。

情報番組らしいが、内容までは頭の中に入つてこない。

昨日の出来事と今日の音夢の態度が頭から離れないからだ。なぜ音夢が怒っているのか分かつてはいるが、どうすればいいのかは全く分からなかつた。

純一はため息をつき、立ち上がる。

トウルルルル

自室に籠り、本を読んでいると、ポケットに仕舞つてあつた携帯電話が鳴つた。

ポケットから携帯電話を取り出し、ディスプレイに表示された名前を確認すると『朝倉純一』

ディスプレイにはそう表示されていた。

› 俊樹 <

「……もしもし、朝倉か？びついたんだこんな時間に

時刻は8時を過ぎていた。

› 純一 <

『ああ……ちよつとな……』

妙に歯切れが悪い。

どうやら言いにくいう事だろ？。

>俊樹<

「喧嘩でもしたか？」

>純一<

『音夢と喧嘩なんて……』

予想通りの答えが帰ってきた。

>俊樹<

「別に音夢ちゃんと喧嘩した、とは一言も言つてないんだが」

>純一<

『うう……』

純一は口ごもった。

これも俊樹の計算のうちだ。

純一が歯切れ悪い時は、大概音夢と喧嘩している時だと言つ事を、俊樹は知っていた。

>俊樹<

「それで、何があつた？」

>純一<

『もし……もしさ、幼なじみとキスした所を妹に見られて、それでその妹が怒つていたら相楽はどうする？』

純一は敢えてやべりと音夢の名前を出せなかつた。

名前を出すのが照れ臭かったからだ。

♪俊樹♪

「難しいな……朝倉、お前はどうだ?もし立場が逆なら、お前はどうある?」

♪純一♪

『えつ……』

純一は少し考えてみた。もし、音夢の部屋を開けて他の男とキスをしていたら……。

♪純一♪

『……イヤだな』

♪俊樹♪

「なら、その妹も同じ気持ちなんじゃないか?だとしたら、今自分が何をすればいいのかハッキリ見えてくるはずだ」

♪純一♪

『……やだな……』

今純一がすべき事は素直に謝る事だ。

『ありがとな相楽』

やつぱり純一は電話を切った。

♪俊樹♪

「頑張れよ朝倉」

電話を終えた俊樹が呟いた。

^\ 純一 く  
「音夢」

電話を終えた純一が向かつた先は洗面所だ。  
音夢は今風呂に入っているため、洗面所に居れば話ができるからだ。

^\ 音夢 く  
「えつ……兄さん」

^\ 純一 く  
「面と向かつて話すと余計にじれるから……」

^\ 音夢 く

「うん……」

^\ 純一 く

「『めんな……わせに過ぎた……』

音夢には純一の言つ『わせに過ぎた』とは居間での事だと分かつていた。  
しかし、純一が何を言つのかは全く分からなかつた、そのため純一  
が言い終えるまで、一切口を挟む氣は無かつた。

^純一^

「音夢が怒つて『のせたくべりとキスをしたからじやないんだよな』

「これは相楽と電話をした時に気付いた事だ。」

^純一^

「俺も音夢の部屋を開けたら知らない男とキスをしてた……何て言つのはイヤだからな」

^音夢^

「そんな事するわけないじゃ無い……！」

音夢は顔を真っ赤にしてそれを否定した。

^純一^

「分かってるよ……何て言つか、その……」の家のルールと言つか  
……つまつあれだ『親しき仲にも礼儀あり』ってやつだ。それだけ

言い終えた純一は洗面所から出でていった。

^音夢^

「兄さん……」

わづきまで頭の中に靄がかかつていて、純一の話を聞いたりその  
靄がスッと消え去つていた。



俊樹は疲れた表情を浮かべながら、桜並木を歩く。

先程までは信幸と一緒に登校していたのだが、ファンの女の子に囲まれ、散り散りに逃げた。

いつもならこの時間は朝連をやつているのだが、今日は顧問の先生が朝連に来れないという事で休みになつたのだ。

信幸の所属するサッカー部も同様の理由だ。

しかし、それは部員のみ知つている情報でファンの女の子がどうから仕入れたのかは不明だ。

＜俊樹＞

仲直りできたかな朝倉は？……まあ大丈夫だろ朝倉なら

と、考えながら歩いていると後ろから肩をポンッと軽く叩かれ振り向くと純一が立っていた。

＜純一＞

「よつ相楽」

いつもと変わらない様子で声をかけてきた。

＜神＞

「なんだ朝倉か」

＜純一＞

「なんだとは冷たい言い草だな神」

いつも通りに返した所を見ると、どうやら仲直りはできたのだろう。

＜神＞

「朝倉がこんなに速く登校するなんて……今日は雪でも降るのか……

…困ったな」

わざとガツカリする仕草を見せる。

＜純一＞

「どうゆう意味だ」

等とふざかあつて、純一が真剣な表情を浮かべた。

＜純一＞

「昨日はあつがとつたな……」

辛うじて聞き取れるくらいこの小声で言った。

＜俊樹＞

「やつぱぱつて、今日は雪が降るのか？」

俊樹は天を仰ぐが、空は雲一つなく晴れ渡る青空だ。

＜純一＞

「だから、どうゆう意味だ……ん？」

同じよつて学校へ向かう学生達の中に、純一は見知った人物の後ろ姿を見つけた。

＜純一＞

「あれ環じゃないか？」

「あれ環じゃないか？」

俊樹は前を見据えると、後ろ姿からでもわかる独特的の雰囲気を醸し出した環の姿が見える。

「俊樹

「おーい、環

声をかけると長い髪をなびかせながら環が振り返る。

「環

「あら、相楽様、朝倉様。おはよーい! えこます

「純一・俊樹

「おはよー

二人は小走りで追いつくと、彼女の横に並びかけた。

環が転校してきてから数日が経つ。

当初、彼女の『許婚宣言』で沸き立っていたクラスメート達も、俊樹が知らぬ存ぜぬを押し通しているうちに、次第に興味を失ったかのように沈静化していた。

二人がそれらしい態度で接していない……ということも一因なのだろう。

「俊樹

「今日はゆっくりなんだな

毎朝、早起きして巫女の仕事をこなすためか、環は早くから学校に来ていることが多い。

俊樹は朝連が終わると、環がちょうど登校している姿を何度か目撃したことがあった。

そのため小さな時間に登校してくるのは珍しい事だ。

「環

「実は……ちょっと寝坊をしてしまってまして

「純一

「へえ、環でもそんな事があるんだ。じゃあ巫女のお務めとかも?」

「環

「いえ、それはさすがに休めませんから……」

環が言い終わった時、グーとお腹が鳴る音がした。

純一と俊樹が顔を向けると、彼女は恥ずかしそうに俯いていた。

「俊樹

「朝飯を食つ時間は無かつた訳か」

「環

「……はー」

赤い顔をしたまま頷いた。

「環

「お弁当を作ることもできなくて

「純一

「それは学食にでも行けばいいけど……

さすがに朝食だけはどうしようもない。

「純一」

仕方ない……

純一はそつと氣付かれないよつて右手を背中に回し、頭の中で適当な和菓子 饅頭を思い浮かべる。

すると、何も無かつたはずの右手の中には、いつの間にか想像していた通りの饅頭があつた。

「純一」

「これ、よかつたら」

「環」

「え？」

純一が差し出した饅頭を、環は不思議そうな顔で見つめる。

「環」

「これ、どうから？」

「純一」

「毒は入つてないから、遠慮するな」

俊樹は純一の能力を知らなかつたが、手品だつといつぱりこうしか捉らえておらず、あまり氣にも止めなかつた。

「環」

「はい、じゃあ…… いただきます」

純一が無理矢理押し付けるよつてにして渡すと、環は口感いながらも饅頭を口にした。

饅頭を口にした。

「あ、おこし」

さつきまでの赤面した顔が笑顔に変わる。

純一< >

上品な雰囲気もいいが、今のように打ち解けた笑い方もいい。

V 壇へ

饅頭を平らげた環は丁寧に合掌する。

俊樹 <

「環は元レヒとか見るのか？」

話題に困った俊樹が、つい口から出たのがこれだ。

環 <  
>

「いえ……あまりテレビは覗ません」

環は申し訳なさそうに言った。

俊樹

「じゃあ、どうが好きなんだ?」

環 <  
>

「動物が出てるのが好きです……」

環は以前見た『動物○想天外』の事を話した。その内容は、ペンギンの特集だった。動物の話しをしている環の顔は、生き生きとして、楽しそうに見える。

「俊樹」

「動物の本を読むのも好きとか?」

「環」

「たまに読みますけど……一番好きなのは源氏物語です」

「純一」

「えつ、あの七人のアイドル!」

「環」

「何ですか? 七人のアイドルって」

ボケた純一だったが、環には理解不能の様子。

「純一」

「そう言えればさつき、テレビはあまり見ないって言つてたな……」

「環」

「あの……朝倉様?」

「純一」

「あつ……いや、何でもない」

環は小鳥のように小首を傾げた。

「俊樹」

「まあ、あまり気にするな。いつもの事だから」

俊樹は苦笑しながら言った。

俊樹はこの学校中に環のかわいらしさを垣間見たような気がした。

つづく

昼休みになり、要は純一と二人で学食を訪れた。  
要には一つ氣になつたことがあり、純一を誘つたのだ。

〈要〉

「なあ、朝倉一つ氣になつてゐることがあるんだ」

〈純一〉

「なんだ?」

純一はカツ丼を一口食べて応じる。

〈要〉

「一組に転校してきたツインテールの娘と、付き合つてゐて話を  
聞いたんだが……本当なのか?」

〈純一〉

「『ホツ……』

要がいきなり変な事を言つたので、むせてしまつた。

〈要〉

「大丈夫か?」

純一は勢いよくトレーの上に乗つていたコップを掴み、中に入つて  
いた水を一気に飲み干した。

〈純一〉

「こきなり変な事を言つなよな……」

「要」

「それでどうなんだ?」

「純一」

「付き合つて無い。アイツはただの幼なじみだ」

「要」

「セツカ……」

要はそれ以上追及してこなかつた。

一瞬純一は、どこからそんな話を聞いたのか疑問に思つたが、例の問題児一人組の顔が思い浮かび、何も言わなかつた。

「さくら」

「テスト……テスト」

どことなく氣の抜けた校内放送が鳴り響き、周りの生徒がざわめいた。

今まで昼休みに校内放送など流れたことがなかつたからだ。

「さくら」

「お兄ちゃん、ボクだよお昼一緒に食べよ 屋上で待つてるよ」

それだけ言つと、校内放送は切れてしまった。

「純一」

「へへ、そんな大胆なヤツがいるんだな」

純一は今の放送がさくらだとこいつ事があるで気付いてない。

「要」

「スゴイ大胆だな……」

要もカレーを一口食べて言った。

「ちりもわくらだと気付いてない様子。

「音夢」

「兄さん、じるねってますか?」

音夢がひょっこり顔を覗かせた。

「音夢」

「榎君、相席してよろしいですか?」

「要」

「ああ……俺は構わないが……」

音夢は純一の左隣りに空いていた席に腰掛けた。

「要」

「じゃあ、俺は席移るわ」

やつは煙たがりで煙たがりで純一を持つて立ち上がりとした。

「音夢」

「あれ、席移るんですか?」

「要」

「ああ……俺は一人の邪魔をするほど野暮じゃないんでね」

「純一」

「そんなんじゃ無いって……なあ、音夢？」

「音夢」

「「」飯は「」やつて大勢で食べると美味しいですよ」

「純一」

「三人で大勢つて言うのか？」

要が腰を降ろすと、純一が呟いた。

「音夢」

「もう、いいでしょやつ細かい」とはー。

頬を膨らませ音夢が反論する。

「純一」

「それよりもお前、そんなんで足りるのか？」

純一は音夢の正面にある二個のサンディッシュを見て言った。  
年頃だとは「」え、いくらなんでも「」の量は少な過ぎる。

「純一」

「金が無いなら貸してやるつか？」

「音夢」

「大丈夫、財布は持つてきてるから。ただそんなに食べたくないだけから」

「純一」

「だから胸も大きくならないんだな……」

茶化すと純一はカツ丼を一口食べようとするが、隣にいる音夢の殺氣で手が止まる。

「音夢」

「兄ちゃん……どうやら泣き叫びたいようね……」

音夢はいつでも怒りの一撃が振り下ろせるように、自分の足を純一の足の上にセットした。

「純一」

「スマン……全面的に俺が悪かった……」

純一はあいつと白旗を上げた。

「さくら」

「お兄ちゃん！ 何で屋上に来てくれないんだよ～ボク待ってるからね」

再び校内放送が流れれる。

「要」

「またあの放送か……大胆だな」

「音夢」

「！」の声つて…… もしか……」

音夢の脳裏にさくらの顔が浮かぶ。

まさかいくらなんでもここまでするはずは無いだろ？

音夢は自分にそう言い聞かせる。

三人は並んで学食を後にした。

三人の正面から一人の先生の姿が見え、純一を見ると物凄い勢いで近付いてきた。

「朝倉 ！」

〈要〉

「何か怒っているような感じだな……朝倉お前、何仕出かしたんだ？」

要の隣には純一の他に音夢もいるのにも関わらず純一に訊いた。今までの行いを考えれば当然だろ？

〈音夢〉

「兄さん……また、よからぬ事を……」

音夢はジト目で睨む。

〈純一〉

「ちょっと待て、俺は何もしてない！」

見に覚えのないことで犯人にされたくはないため純一は必死で弁解する。

〈要〉

「朝倉……俺にはわかってるぞ……お前がやったんじゃ無いんだろ」

要は助け船をだした。

「純一」

「やつひ言つてくれるのは……要、お前だけだ」

純一は少し感動した。

やつぱり要は俺の味方だ……と。

「要」

「ああ……お前がやつたんじゃない。お前の中にある衝動に駆り立てられただけなんだ……」

しかし、純一の思いは虚しく打ち崩される。

要は純一をガツチリと掴み、逃げられなによつにした。

隣にいた音夢も同じ行動を取る。

今の今までつかり忘れていた事があった。

それは音夢が『風紀委員』だと言う事だ。

要一人にしがみつかれたら、何とか振り切る事ができるが、音夢まで加勢したとなればそう簡単に逃げ出せ無くなる。

「純一」

「ちよつと待て音夢、俺がそんな事をすると思つのか?」

「音夢」

「はいー。」

即答されてしまった。

「純一」

「俺がそこまで信用できないのか?」

「音夢」

「全然信用できません」

それでも諦めず抵抗したが、音夢も要も逃がす様子はなかった。

「ああ、職員室に行こう。朝倉」

要と音夢は純一を二人の先生に身元を引き渡した。

その後、職員室に連行された純一は、さくらと共に説教を受ける羽目に、純一は自分がなぜ説教を受けているのかイマイチ理解出来なかつたが先生の話によると、さくらが放送室を乗つ取つた事を、連帶責任とされ純一が職員室に呼ばれたのだ。  
つまり純一は巻き込まれただけだった。

つづく

廣隆は学食に向かつたため階段を降りたが、後ろから聞きたくない声が廣隆の耳に届く。

〈暦〉

「おや、相沢じゃないか。いい所で会つたね」

廣隆の後にはキラリと眼鏡を光らせ、悪魔のよつた笑みを浮かばせた暦が立っていた。

〈廣隆〉

「これはこれは暦先生じゃないですか。」機嫌麗しゅう……

〈暦〉

「思つてもない事を口こじなくてこよ。三つだけ無駄だつての」

暦は少々呆れ顔だ。

〈廣隆〉

「つで、何の用つすか？」

呆れ顔だつた暦だが、何かを思いだしたのか再び悪魔のよつた笑みを浮かばせる。

〈暦〉

「この前のテストの事で少し訊きたい事があつてね」

〈廣隆〉

「おや、相沢じゃないか。いい所で会つたね」

「『』の前のテスト』と同じと、実力テストの事ですか？」

それは以前『テストをやるぞ』と言つて曆の発言から始まつたテストの事で、曆はこれを『実力テスト』と名付けた。

〈曆〉

「そりゃ、どうやつたらあんな点数が取れるのか教えて貰いたいと思いましてな」

曆はニヤリと笑う。

この表情はヤバイ。

瞬時に脳裏をよぎつた。

廣隆は去年もこの人が担任だつた、そのためこの表情をする時は何かヤバイ時だと言つ事を知つていた。

『逮捕状はあるのか』と言いたい所だが、仮に言つたとしても『私が法律だ』と返されるのだろう。

この人はそういう人だ。

廣隆は有無を言わさず、首根っこを掴まれ実験室に連れて来られた。ここは曆専用の休憩室となつてゐる。

〈曆〉

「あのやつ、7点つてなんだよ7点つてーーー

〈廣隆〉

「いやー、その……縁起がいいかなー……と思つて……

〈曆〉

「じゃあ何か、狙つて取つたて言いたいのかい？」

〈廣隆〉

「じゃあ何か、狙つて取つたて言いたいのかい？」

「やついつ事になりますかね……」

まるで取調べを行われている犯人のようだ。

廣隆は追及の手を何とか逃れるため奮闘する。

だが鬼刑事・暦の追及を逃れることは不可能に近かった。

「暦

「ふざけんじや無いってのー！そんなに言つならフフ点取れつてのー！」

「廣隆

「いや、ほり……潔さつてあるじゃないですか……」

「暦

「ふうん、潔さね……じゃあ今度は狙つて100点でも取つてもいいたいね。そのほうが、よっぽど縁起がいいぞ」

「廣隆

「アハハハ……」

ガラガラ

廣隆が「まかし笑いを上げていると、実験室の扉が開いた。中に入つて来たのは、人形……？　いや、人形を抱えたアリスだ。

「暦

「月城？どうしたんだい、何か用か？」

「アリス

「……呼ばれたので」

<暦>

「ああ……そうだった、私が呼んだんだ」

前に一度アリスに『いつでもいいから実験室に来い』と言っていた事を思い出した。

<暦>

「月城、学校は遊び場所じゃ無いんだ。だから、学校に人形を持つてくるのは……」

<アリス>

「……大事なんです。ピロスは私の大事な宝物だから……」

<暦>

「月城……あのな」

<廣隆>

「まあまあ暦先生、月城も次から気をつけるって言つてるし……」

見兼ねた廣隆が助け船を出した。

<暦>

「はあ? そんな事、一言も言つて……」

<廣隆>

「ほら月城も気をつけるって言つとけ、この人は恐い人だ。いつ実験材料にされるかわからないぞ」

<アリス>

「……氣をつけます」

〈暦〉

「相沢……あんた……」

暦は『ハア……』とため息をついて、アリスに向き直る。

〈暦〉

「わかつた。月城、次から氣をつけるんだよ」

〈アリス〉

「はい……」

アリスはペコッと頭を下げるとい、実験室を出でいった。

〈廣隆〉

「ふう……」

と息をついてつかの間、暦が廣隆を問い合わせる。

〈暦〉

「相沢、あんた一体どうこうつもりだ?」

〈廣隆〉

「えつ……だ、ダメですよ……あの人形は」

〈暦〉

「あの人形が大切な物くらいわかつてるよ」

〈廣隆〉

「じゃあ何もわざわざ呼び出さなくても……」

〈暦〉

「教師が私一人だつたら何も言わないさ。だけどああぬうのを毛嫌いする先生もいるんだよ」

暦が言つている事も理解できる。

それは、生徒側からしても同じだからだ。

廣隆は慣れてしまったから別に何ともないが、初めてアリスを見た人は彼女を変な女の子と思うだろう。

〈暦〉

「あの娘は何かが足りないんだ。最近は天枷が付き纏つてるらしいけど……相沢、あんたあの娘の事何か知つてるのか?」

〈廣隆〉

「いえ……何も

〈暦〉

「だつたら……なぜ、月城を庇うんだ?私が知つてるかぎりでは、アンタとあの娘との接点は無いに等しいんだがね」

廣隆を知つている他の人も、暦と同じ事を言つだろう。

〈廣隆〉

「色々あるんですよ

〈暦〉

「そうかい、そうかい。わかつたよ、月城に何かあつたら相沢が面倒見るつて事だな」

〈廣隆〉

「えつ、俺が！」

〈曆〉

「そういう事だろ今は」

曆はニヤッと笑みを浮かばせる。

こうなる事がわかつていたらしい。

廣隆は嵌められたといつ氣持ちになつた。

〈廣隆〉

「朝倉じゃないが、かつたりいなさう」

〈曆〉

「ぼやくな、私も何とかしてやりたいと思つてたんだ。見るからにいつも一人で……だけど立場上そうしてはくれないし

〈廣隆〉

「それで俺には何も出来ないですよ。それとも言つたよつて、相手にされてないと言つが……」

廣隆は珍しく考え込む。

〈曆〉

「そつ難しく考える」とは無いよ。アンタができる事を出来る時にすればいいんだ

曆は言い終えると急に立ち上がる。

<暦>

「ああそつだ、相沢アンタ飯はまだか？まだだつたら齧つてやるよ

<廣隆>

「えつ？マジつすか

<暦>

「学食でいいならな。ホントは特定の人と、こういう事をしてはいけないんだが……まあ、たまにはいいだる。テストの点数は7点しか取れないが、他にいい点を取つてるからな」

扉をガラガラと開けて出でていった。

<廣隆>

他にいい点を取つてるつて何だ？まつ、いいか

廣隆も暦の後を追つよつて実験室を出でていった。

## 放課後

俊樹は舞い落ちてくる花びらを片手で払いのけながら、向かつた先は、自宅ではなく神社だ。

今の俊樹にとって、当たり前となつてしまた桜より、転校生の『許婚宣言』の方が重大な問題である。

環は時間をかけて、二人の間にある『深い絆』とやらの意味を探したいと言つていたが、曖昧なままでは気持ちが悪い。と言つわけで、俊樹は久しぶりに神社へとやつてきたのだが、境内へと続く長い石段に閉口してしまつた。

なぜか神社というのは、小高い丘か山の上にある場合が多い。

&lt;俊樹&gt;

何でこんなに長いんだ……

等と考えながら、黙々と石段を上つていると

&lt;環&gt;

「あら、相楽様ではないですか」

不意にその当人から声をかけられ、俊樹は驚いて顔を上げた。見ると、いつの間にか境内が見えてきており、その中央では箒を持った環が掃除をしているところであった。もちろん彼女は巫女姿だ。

&lt;環&gt;

「ようじさんお越しくださいました。お参りですか？」

「俊樹」

「ん、まあ……そんなもんだ」

目的は環と話すことだったのだが、せっかくあの長い石段を上つてまで神社にせつってきたのだから、お参りくらいこなしてもいいだろ。ひ。

「環」

「あつ、参道を歩かれる時は、端の方を歩いた方がいいですよ」

「俊樹」

「そうなのか?」

「環」

「ええ、参道の真ん中は神々が通られますので、人はそれを避けて端を歩くのが古くからの習わしなのです」

「俊樹」

「知らなかつたな」

さすがは巫女と、妙な感心をしながら拝殿への階段を上がつて賽銭箱の前に立つ。

五円玉を投げ入れ、鈴を鳴らして頭を一回下げる。

そして、一回拍手を打つた後、田を閉じて心の中で住所と名前を告げて願事を伝える。

『一拝一拍手一拝』といつやつだ。

詳しいことは知らないが、この程度の知識はある。

誰かから聞いたような、何かの本で読んだのかは忘れたが。お参りを済ませた後、俊樹は改めて境内の中を見渡した。

子供の頃によく遊びにきたものだ、廣隆・信幸・要・圭一の四人と

共に来た事もあった。

縁日があつた時は夜中に家に帰り怒られた事もあつた。  
付属に入つてから訪れるのは初めてではないだろうか。  
かなり広いと思つていた境内も、今改めてみるとちんまりとした  
印章で、おまけに俊樹以外、訪れている参拝客は誰もいなかつた。  
ましてや地元の小さな神社など、日々の参拝で訪れるような者はい  
ないのだろう。

＜俊樹＞

「それにも大変だな。毎日掃除するのか？」

＜環＞

「これも巫女の務めの一つですから」

俊樹が声をかけると、環はそう言つてこつこつと笑つ。  
俊樹はふと境内の隅にある樹に気付いた。  
巨大な楨の樹で、樹齢何百年というところだろう。  
御神木らしく、周囲には柵が設けられている。

＜俊樹＞

「こんな樹あつたか？」

子供の頃から何度もなくここに遊びにきていたというのに、こんな  
大きな楨の樹があつたことは覚えていなかつた。  
だが、なぜか懐かしい気分になるのだ。

＜環＞

「相楽様、どうかなされたのですか？」

ジツと楨の樹を見上げている俊樹に、環が不思議そうに訊いた。

「俊樹

「いや、」の樹になんだか見覚えがあるような気がするんだが……」

「環

「見覚え、ですか？」

「俊樹

「ああ、でもよく思って出せないんだ」

「思って出すとするのだが、すぐに靈がかかるって思って出す」とが出来ない。

「俊樹

「ああ、やめだやめ……」

俊樹は頭を搔きむしって、環の方を振り返った。

「俊樹

「考え込むのは性に合わん」

「環

「相楽様らしきですね」

環はクスクスと笑う。

「俊樹

「そつこええば、神主さんの姿を見ないけど……」

「環

「

「以前の富岡さんが体調を崩してしまったんですが、今までいた神社の都合もありまして……」

〈俊樹〉

「じゃあ、今は環だけ？」

〈環〉

「ええ……父は来週から。とりあえず巫女だけでも早く来て欲しいと言われて」

〈俊樹〉

「それでこの時期に転校して来たわけか」

担任が言っていた『神社である家庭の都合』とは、そういう意味だつたらしい。

〈環〉

「はい、それに学校の事も……」

〈俊樹〉

「学校？」

〈環〉

「あっ、いえ……なんでもあつません」

失言してしまったという感じで口元を押されると、環は急に俊樹から皿を逸らした。

〈俊樹〉

「何が言いくらい事か？」

「何が言いくらい事か？」

「……」

俊樹の質問に、環はちょっと困ったような表情を見せる。  
許婚に対しても隠し事はしたくないが、話すには支障がある……という感じだ。

「俊樹」

「言つにくい事なら無理に訊く気はないけど、困つたことがあるなら言つてくれ。助けになるぞ」

「環」

「はい、ありがとうございます。でも大丈夫ですから」

気にはなつたが、そう無理に訊く事はない。

環が本当に困つて助けを求めて来たら、その時は力になつてやればいいのだから。

「俊樹」

「ところで……」

俊樹は気分を変えるよつて、かねてから気になつていたことを訊いてみた。

「俊樹」

「巫女つて実際には何をやつてるんだ?」

「環」

「そうですね……」

環は少し考えてから、『色々な事です』と曖昧な言い方をした。

「俊樹

「色々ねえ……」

「環

「逆にお訊きしますけど、相楽様は巫女がどんな事をしていると  
思ひですか?」

「俊樹

「うへん……そうだな」

改めて訊かれると返答に困る。

「俊樹

「おみくじや、お札を卖つたりとか……」

「環

「そうですね。それも巫女の仕事です」

「俊樹

「でも、それだけじゃないんだろう?」

「環

「神に使って神事を行い、神意を伺つて神託を告げるというのが巫  
女の仕事ですが、実際には雑用をこなす」との方が多いですね」

環は苦笑するように言った。

そう言えば、先程の境内の掃除も巫女の務めの一つだと言つていた

はすた。

「環

「あと、お茶やお煙や舞も畠つたつしますけど」

「俊樹

「へえ……舞か」

「環

「お祭りの際、祈願者の前で舞つんです」

「俊樹

「やついや、そんなのをテレビか何かで見たよつな気がする」

結構、綺麗な舞であつたよつな記憶がある。

環がその舞を踊るところのあれば、是非とも見てみたいものだ。

「俊樹

「なあ、その舞つてやつをよつと見させてくれないか?」

「環

「私の舞を、ですか?でも、まだお見せするまじのものでな……」

環は小さく首を振つて、俊樹の願いを拒絕した。

人に見せられるまじのレベルではないのか、それとも神事に関わるために、簡単に披露できるものではないのか。どちらにしても環にはそのつまつはないようだ。

「俊樹

「そつか、残念だ。でも、いつか見させてくれると嬉しいな

<環>

「そうですね。では、いざれ」

<俊樹>

「ああ、楽しみにしているよ」

俊樹は本心からやう言つた。

「………」といふのがいつになるのか分からぬが、二人の深い絆とやらが本物であるなら、俊樹達はこの先もずっと一緒にいるはずなのだから。

SCENE 26 (前書き)

評価・感想等を書いていただけると幸いです。

純一は夢を見ていた。

いや、正確にいうのなら『見せられている』だ。

純一は薄暗い部屋の中に立っていた。

辺りを見回してみるが、机と椅子、ベッドがあるだけの殺風景な部屋だ。

純一の正面には窓があり、その側には椅子に腰掛け、外の様子を眺めている一人の少女が見える。

彼女は窓から差し込む太陽の光りで逆光となり顔はハッキリと見えないが、長い髪を後ろで束ね、おしとやかな雰囲気を醸し出し、どこかの令嬢といった感じに見える。

彼女の膝の上には猫が丸くなつて乗っていた。

そこまでは何の不思議もないのだが、純一の脳裏にある一つの疑問が浮かんだ。

それは、今まで『夢を見せられる』時は、自分の知っている人だけだったのだが、今自分の目の前に座っている少女は見たことが無いということだ。

「いい天氣……」

窓から外をぼんやり眺めて呟いた。

「今日もあの人に会えた……でも彼の隣で楽しそうに歩いているのは、黄色いリボンの娘は彼女かな？」

上に向いていた視線が下に移る。

彼女は外を歩いている一人……いや、男と一緒に学校に向かつて歩いていた女の子を羨ましく思つた。

「彼と一緒に学校に通えたら……」

楽しそうに歩いている一人を見つめながら囁く。

「でも……無理よね……お父様、絶対お許しにならないよね……」

少女は猫を呆然と見つめながら囁く。

「純一」

「あのね……自分の考えをお父さんに言わないと伝わらないって……」

相手にこの声が届かないとわかっているが、それでも純一は言わずにはいれなかつた。

何の役にも立たないこの能力が、せめて相手に自分の声が届けば、多少はこの能力も役に立つのだが……。

「あの人と一緒に学校に行けたら、どんなに楽しいか……でも、あの人と話すチャンスがあれば……」

「純一」

「そりや無理だって、こんな部屋に閉じこもって、ソイツと話しながら出来ないって。まずは部屋から出て話し掛けないと……」

彼女に届くわけない。

当たり前だ。

今の純一は、他人の夢をのぞき見しているだけなのだから。

「頼子……お前はいいわよね……自由に外に出られるんだから……」

頬子と呼ばれた猫の背中を撫でながら言った。  
すると頬子はスッと立ち上がり、窓から飛び出して行った。

「あつ頬子……！」

彼女は窓から出でていた頬子をただ眺めていたことしか出来なかつた。

ジリリリリ

部屋の中に、田舎まし時計の騒々しい音が鳴り響く。  
純一は手探りで、サッカーボール型の時計を探し当て、スイッチを  
切り、寝ボケ眼で時計を見る。

8時30分

＜純一＞

「ヤバ！ 遅刻だ！！」

純一はガバッと勢いよく起き上がり、ベッドから降りるが……

＜純一＞

「かつたりい……今日はサボるか……」

純一はサッカーボール型の時計をベッドに放り投げた。

＜純一＞

「こんな時間に学校に行つてゐるヤツの気が知れないね」

着替えを済ませた純一が向かつた先は桜公園だ。

初音島の中央にある事から、『初音島中央公園』と名付けられているが、一年中枯れない桜の木が咲いているため、島民からは『桜公園』と呼ばれ親しまれている。

「この妖怪めー」

＜純一＞

「ん、何だ？」

純一が見ると、小学生と思われる子供達が、五、六人で何かを囲んでいた。

恐らく、子供達の言つ『妖怪』と呼ばれていた生物だらつ。

＜純一＞

妖怪ねえ……この島には、一年中枯れない桜の木やら、出来そこないの魔法使いやら、十年前から姿の変わらない子供つてのいるからな……今更何を見ても、そう簡単に驚かないっての……

純一は子供達の横を通り過ぎよつとしたが、子供達に苛められる『妖怪』とやらに興味が沸き、通り過ぎるこじが出来ずチラッと子供達の頭上から『妖怪』とやらを覗き見る。

長い髪に、端正に整つた顔立ち、どこかおしとやかな雰囲気を醸し出す女性がその場でうずくまつていた。

一見普通の女性のよう видимоえるが、おかしい所が一つあつた。一つは、なぜかメイド服を見に纏つてゐるという事、二つ目は、頭に猫耳が生えているという事だ。

「純一」

なぜにメイド服？そして、なぜに猫耳？

さすがの純一もこれには驚いた。

見てしまつたからには放つておく事もできず、純一が一番嫌いな『  
かつたる』事をする。

「純一」

「おい」

純一は近くにいた少年の右肩を左手でポンッと軽く叩き、少年が振り返ると純一はガンを飛ばした。

左足は少年の方に向け、右足は少し離した所に九十度の角度で置き、右手はポケットに入れ、左手は握り拳を作り、顔はえぐるよつに睨む。

「純一」

「何してんだ、コラ！？」

その顔を見た子供達は泣き叫んで逃げていった。

「純一」

まさかアレがこんな形で役に立つとは……

純一がやつたガン飛ばしの方法は以前、要から聞いた無駄知識だ。トリ○アの泉でも絶対使われないだろ？

純一は『こうやってガンを飛ばせば大概のヤツは逃げていって、何かと役に立つぞ』と要が言つていたのを思い出した。しかし、その時は『役に立つことはないし、絶対使つことはないだろ？』と思つていたのだ。

純一はかつたるやうに、頭を搔いた。

つづく

&lt;純一&gt;

「大丈夫か？」

純一は子供達を追つ払つた後、ネコ耳にメイド服を着た少女に話し掛けた。

&lt;頬子&gt;

「あの……助けて下せつて、あつがとうござります。私、鷺澤頬子と申します」

頬子は正座へと姿勢を正し、深々と頭を下げる。

&lt;純一&gt;

「これまじ一寧はひつま……俺は朝倉純一と申します」

丁寧に自己紹介をする頬子にひられ、純一もその場で正座をすると、深々と頭を下げた。

端から見ればお見合いをしているようだ。

&lt;純一&gt;

「無事みたいだし、じゃあ俺はこれで……」

立ち上がり、その場を去り、純一の服を頬子がギュッと掴んだ。

&lt;純一&gt;

「まだ何か用……？」

「まだ何か用……？」

〈頬子〉

「えつと……あの……」

何かを言いたげな頬子だったが、ある人物がそれを遮る。

〈杉並〉

「フツ……相変わらず鈍いな、朝倉」

「杉並！お前一体いつからそこそこ……？」

〈純一〉

いつの間にか杉並が、頬子の隣で腰を下ろしていた。

〈圭一〉

「何、今し方だ……」

答えたのは純一の背後にいた圭一だ。

圭一は頬子へと近づき珍しそうに眺めた。

〈純一〉

「神出鬼没だな、お前達は……」

純一は呆れながら一人を見る。

〈頬子〉

「あの……」の方達は？

頬子は恐る恐る純一に尋ねる。

「純一」

「ああ「ハイツ等は杉並と北川で……まあダチみたいなものだ」

その『ダチみたいな一人』はといふと、ポケットから取り出した虫眼鏡で頬子の頭にあるネコ耳に近づけ叫ぶ。

「杉並」

「見よ！生きた化石だ。リアルミステリーが、今我々の目の前で息をしてるのだぞ！」

「圭一」

「くあー、ネコ耳とは參った。盲点だった」

なぜか悶えながら言つ圭一。

「杉並」

「その立派なネコ耳は本物なのか？」

頬子の耳を触るひつと近づくが、純一が杉並を止める。

「純一」

「お前ら、失礼だろ……その剥き出しの好奇心を仕舞え」

「圭一」

「では朝倉、お前は氣にならんと言つのか？触れてみたいとは思わんのか？」

頬子の隣で腰を降ろしていた圭一が問い合わせす。

「圭一」

「フツ……冗談はそれくらいにして、時に朝倉、お前まさか彼女をこのまま放つておく気か?」「…

「純一」

「俺にどういふこと?」

「杉並」

「幸いお前の両親は海外赴任中、空き部屋があるではないか

純一によつて捕獲された杉並だったが、いつの間にか脱出して純一の背後に回っていた。

「純一」

「えつ……マジか?」

「ママ、アイツだよ。僕が遊んでいたのに邪魔したのは……」

純一、杉並、圭一、頬子の四人が声のした方を向くと、そこには先ほどの子供がいた。

その隣には、コレステロールのとりすぎで立派な贅肉を身に纏い、派手な恰好に、厚化粧、インテリ眼鏡をかけたオバサンが立っていた。子供は母親を引き連れてきたのだ。

「まあ!いい歳して、私の可愛い坊やを苛めるなんて許せないザマス!」

「杉並」

「おお!あればザーマスおばさんではないか

感慨深げな声を上げる杉並に首を傾げた純一が問う。

純一

「サー、マスおはさん? 何だそれは?」

「現代では既に絶滅したと言われているザーマスおばさん、ミステ

杉並列びに圭一の両名の興味の対象が頬子から『ザーマスおばさん』なる人物に移り変わったが、今の純一にとつてそんな事はどうでもいい事だつた。

純一

「あつ、はい！」

純一は頬子の手を引き、杉並、北川の二人を囮にして逃げ出した。

卷之三

「ではまたお会いしましょう、生きた化石のお嬢さん!」

-7-

地響きのような音がある。

二人が『何の音だ?』と不思議そうな顔をして、音のする方を見る  
と『ザーマスおばさん』が一人目掛けて突っ込んできた。

「邪魔ザマス！！」

く 杉並・圭一 く

「 ぐはつ ！」？

『ザーマスおばさん』は一人を突進して吹き飛ばし、純一と頬子の後を追つた。

つづく

朝倉家

&lt;純一&gt;

「ハアハア…… わすがに」」までもくれば……」

純一は呼吸を整え、搾るよつて顔を出した。

&lt;純一&gt;

取り敢えずこれで一安心……あとま……

呼吸を整えた純一は安堵の息を漏らす。

純一は毎日のように朝から走っているため、少し間をおねばある程度呼吸が調うよつになつてきただ。

玄関口で座り込んでいる頬子をチラッと見る。こちらは純一とは違つて未だ呼吸が調つていなによつだ。

&lt;純一&gt;

「落ち着いたら送つてこくよ」

&lt;頬子&gt;

「えつ、私ここから出たくあつません」

頬子は縋るよつな思いで純一の服の裾を掴んだ。

&lt;純一&gt;

「……ああこいつ事があつて外に出たくないつて言つて気持ちはわかるよ。でもそつしたら自分の家に帰れないだろ?」

すると頬子は頭を伏せて聞き取るのがやつとの位の小声で話した。

「頬子」

「いえ……違うんです。あの実は私……その……家が……」

純一は『まさか』とは思つたが、『そんな事あるはずない』と自分に言い聞かせる。

しかし、次に放たれた頬子の一言で『それ』が現実のものになる。

「頬子」

「家が……無いんです……」

「純一」

「……やつぱり」

「頬子」

「あの……もし宜しければ、私を『ここにメイドとして置いてくれませんか?』

頬子は再び縋るような思いで純一を見上げた。

「頬子」

「あの……見た通り私はメイドですから……」

「純一」

「そりゃやつだナビ……」

「頬子」

「料理でも、洗濯でも、掃除でも何でも言つて下せー

純一は素直に頷けなかつた。  
それには理由があつたからだ。

「純一」

そんな事したら音夢に何て言われるか……

こんな可愛い子が『ここに置いてください』と言われて断る理由が  
どこにあると言つのだろうか。

一人暮しなら迷わずOKしてしまうところだが。  
しかし、そう出来ないのは音夢がいるからだ。  
拾つてきた犬や猫だつたら何の問題もない。

だが、生憎こちらは普通の人間だ。

まあ、ネコ耳があると言つては『普通』とは言えないような気は  
するが……。

ネコ耳とメイド服を着ていると言つては、間違いなく人間な  
のだ。

「頬子」

「ダメ、ですか……？」

暗い表情で呟くが、上田使いで純一を見ている。

正直言つて純一は、この目に弱い。

理性が崩壊しそうだつたが、なんとか保つ事が出来た。

「純一」

「えつと……取り敢えず今日は……と言つ事で……」

「頬子」

「はい！ありがとうございます。それで、私は何をすればいいです

か？」

「純一」

「え？ うーん…… そうだな、じゃあ掃除から頼むよ」

「頬子」

「はい！ 頑張ります」

頬子は意気込む。

それを見送った純一は着替えるため一階へ上がりうとする。しかし、『キヤアア』と言つ頬子の叫びを聞いて、その場に立ち戻る。

「純一」

「大丈夫？ 頬子さん……」

純一が見ると、なぜか頬子は掃除機に追われていた。

「頬子」

「純一さん、助けてくださいーーー！」

純一は掃除機のコンセントを抜いた。

「頬子」

「ありがとうございます。純一さん……」

「純一」

「えっと…… 掃除はいいから、洗濯を頼むよ……」

「頬子」

「はい、任せてください！」

先程と変わらない意気込みを見せた。  
それが逆に純一を不安に陥れる。

＜純一＞

大丈夫かな……？

と不安になりつつ、再び一階に上がりつつした。  
しかし、また頬子の『キャアア』と言つ叫び声を聞いて、  
洗面所に急いで向かつ。  
すると、洗濯機から泡が吹き出していて、洗面所が泡塗れになつて  
いた。

＜純一＞

「……一体何をやつたの？」

洗面所の泡をタオルで拭き取りつつ頬子に訪ねた。

＜頬子＞

「はい……寒は……」

頬子の話では、洗剤を全部入れたとの事。

＜純一＞

そりや、こつなるよ……

純一は頬子に着替えさせて、一階へと上がり、濡れた頬子のメイド  
服……衣服を干した。

「純一」

「今までどう生きていたのや？……」

「頬子」

「スミマセン……」

「純一」

「まあ、慣れないことは仕方ないよ」

「頬子」

「ありがとついでます……お優しいんですね」

「純一」

「そんな事無いよ……」

純一は、照れ隠しのため頬子から目線を逸らした。

しかし、純一が目線を逸らした先には、ブラジャーが干されていた。  
サイズはかなりデカい。

「純一」

「え……頬子さんって、結構ナイスバディ？」

等と不埒な考え方まで浮かび、純一は慌てて首を振る。

「純一」

「しかし……頬子さんの、あのネコ耳は本物？」

純一は階段を下りながら、頬子のネコ耳を凝視した。

先に頬子が下りていて、純一は頬子のネコ耳を見下ろす形になる。

純一の中から湧き出る好奇心に逆らえず、少しづつ頬子のネコ耳に

純一の右手が近づく。

そんな純一の不穏な動きを察知したのか、頬子が振り向いた。

純一は慌てて右手を引っ込めるが、その拍子で足を滑らせ頬子を巻き込んで、派手に転げ落ちた。

さらに運の悪いことに、玄関のドアが開く。

「音夢」

「ただいま」

帰つて来たのは無論音夢だ。

「音夢」

「……」

「純一」

「……」

純一と音夢の視線が合つた。

しばし、朝倉家を静寂が包み込む。時間にして、ほんの数秒。

「純一」

「やあ、音夢。おかえり……」

先に口を開いたのは純一だ。

「音夢」

「こ……兄さん……！一体、何をやつてるんですか……」

音夢の怒りが純一に向かう。

まあ、無理も無い。

純一が、メイド服を着た頬子を押し倒している形になつてゐるのだから。

端から見れば、メイド服姿の頬子に欲情し、純一が押し倒しているよひにしか見えない。

「純一」

「違うんだ、音夢……これが……深い理由が……！」

「音夢」

「一体、どんな理由があつてこんな玄関先で押し倒してゐるんですか……！」

純一は弁解しようとするが、音夢は聞く耳持たなかつた。

「パンパカパン！」これから、頬子さんのメイド最終試験『料理テスト』を行いま～す。」

なぜか、やくらがホリホリだ。

「面夢」

「じつじつ、やくらがやんがいじるんでですか？」

音夢はつたまるを頭に乗せたやくらが語った。

「面夢」

「じつじつ、審査員は多い方がいいでしょ？ ねつ、うたまる」

「やくらが語る」

「ニヤー」

純一と音夢が頬子の処遇をじつじょうか揉めていた時に、やくらは玄関のチャイムも鳴らさずにこきなり入ってきたのだ。

「やくら」

「それにしても音夢わやん、こんなによく許したね」

音夢の性格からすれば、『ダメですか』とたつた一言で切り捨てると思っていた。

そのため、『料理テストの結果を見て、それから判断します』と言つたのが以外だったからだ。

だが、それには理由が合った。

「純一」

「なあ、音夢。よーく、考えてみる。頬子さんの料理が超一級絶品料理だとしたら、俺達の食生活に希望の光りが差し込むんだぞ」

純一が言つゆつて、今まで惣菜、ロハジーの弁当、店屋物のロードショーンだったのだ。

もし、頬子の料理が超一級絶品料理だとしたら、今までのロードショーンは無くなると言つ訳だ。

音夢をそう言つて令めた純一はと黙つて、食材の買い出しに向かつた。料理なんてしない……と言つたが、出来る人間がこの家にはいない。そのため、冷蔵庫の中に食材なんて何も入つていないので。

「音夢」

「卑怯です、兄さん。あんな説得するなんて……」

だが、純一の言つゆつて音夢もつい加減、あのロードショーンは飽きていた。

まあ、そんな生活を何年もやつていれば、飽きてくるのは当たり前だが。

だから、音夢は果断に断る事ができました。

「純一」

「ただいま」

買出しに行つていた純一が帰ってきた。

「純一」

「とりあえず、こんだけあれば何とかなるだろ

買つてきた食材をテーブルの上に置いた。

その量は、今まで朝倉家の冷蔵庫に入っているのが見た事ないぐらいに多く、フルコースを作つても食材が余るだろう。

「純一」

「それじゃ、頼んだぜ頬子さん」

僅かな希望を胸に抱き、純一は頬子に託した。

「頬子」

「はい！任せてください」

頬子は意氣込んだ。

その姿を見た純一は、期待と安堵が入り混じった表情を浮かべる。

「頬子」

「ところで、これは……何でしょ？？」

近くにあつたキャベツを取り、尋ねた。

「純一・音夢・さくら」

「……」

純一の期待と僅かな希望とやらは、脆くも崩れさつた。

それから數十分後　。

「頬子」

「あの……どうですか？」

頬子の料理を食べた三人と一匹は

「さくりん」

「……甘くて……苦くて……べトべトしてて」

「音夢」

「田に滲みる……何なのコレ?」

「頬子」

「えっと……湯豆腐です」

頬子は自信なさ氣に言つた。

出された料理はもはや、『湯豆腐』では無かった。  
見た目は紫色した液体の中に、なぜか緑色の豆腐が浮いていて、臭  
いは未知なるもので、味はと言つと、音夢の殺人料理にも引けはと  
らないだろう。

その事は、口が裂けても音夢の前では言えないが。

「純一」

「……どうせつたら、普通の食材からこんな刺激物が出来るんだ?」

純一は悶えながら、声を絞り出した。

「頬子」

「あう……また失敗でした……」

「音夢」

「兄さん……どうすんだですか?」これから

音夢は純一に詰め寄り、問い質す。

「純一」

「……どうするって言われてもな

「さくら」

「……そんな事より、ボクお腹減った……何か食べたい食べたい食べたい食べたい！」

さくらが両手をブンブンと振り回し、駄々をこねた。

その姿はまるで、子供が駄々をこねているようにしか見えない。

「フッ……そんな事もあらうかと」

四人は声のした方を振り向くと、杉並がソファーに腰掛けていて、彼の右手には白い袋が握り締めていた。

「純一」

「おっ、それは！オレの大好物の押野屋の牛丼、しかも特盛りのつゆだく！やっぱ、持つものは友達みたいなやつだな」

純一は、杉並がどこからこの家に入ったのか？

また、なぜここに居るのか？

その疑問は、問わなかつた。

杉並に問うだけ無駄だと言う事が分かつていたからだ。

純一達は杉並から、牛丼を受け取り、食べ始めた。

## SCENE 30 (前書き)

やつと、頼子初登場編が書き終わりました。でも、この小説はまだ続くので全部読んで、面白いと感じていただければ光栄です。感想・評価して下さい。

純一・音夢・やくひとなぜかうたまるの三人と一匠は、杉並が持つてきた牛丼を食べていた。

「杉並」

「ヒロシ、朝倉。サギーの処遇は決まったのか?」

「純一」

「サギー、頬子さんを変な奴前で呼ぶな」

「音夢」

「その話はしないでトセコ」

牛丼を食べ終え、人数分のお茶をいれた音夢が杉並の言葉を遮った。その表情は少々「立腹のよう」見える。

「音夢」

「先ほどの料理テストで全てのメイド適正試験が終了しました。その結果、メイドさんとして不適格と決まった事ですか?」

「頬子」

「えつーそ……そんな……頑張りますか?、全部出来るように頑張りますから、お願ひします」

頬子は田に涙を溜め、上田遣いで音夢に必死に懇願する。

音夢も純一同様、この田には弱い。

しかし、音夢は純一とは違い強い意志がある……はず。

「音夢」

「つ……頬子さんが一生懸命なのはわかるけど……でも、やっぱ  
り」

「杉並」

「やはり、何もわかつていしない朝倉妹よ」

音夢が言いかけて、今度は杉並が遮った。

「音夢」

「何がですか?」

「杉並」

「重要なのは、メイドとしての適性などでは無く、一番重要なのは  
サギーがネコ耳の持ち主だと言つ事だ!」

杉並は、ビシッと人差し指で頬子を指差して言つた。

「音夢」

「……はい?」

音夢は目をパチパチと瞬きさせた、杉並を見据えた。

音夢やわくらは、イマイチ杉並の言つてこる事が理解できない、と  
言つよつた顔をする。

これが普通の反応だ。

約一名を除いてはリアクション無しと言つ結果が出た。

杉並と長く関わっていたため、多少の事では動じないのだらけ。

「杉並」

「この謎を解明せずして、何がミステリー博士か!」

「純一」

「要するに、頬子さんを身近な所に置いておきたかっただけだろ」

「杉並」

「おお、珍しく察しがいいな朝倉」

杉並は、悪びれた様子も無くサラりと言つてのけた。

本来ならここで反論するべき所なのだろうが、杉並に反論した所で無駄だと嘗つ事が身に染みてわかつていていた。

そのため、反論する気力すら失せる。

「音夢」

「それで、なんで家なんですか？杉並君の家にでもいこじやないですか！」

未だ納得のいかない音夢は、杉並に吠える。

そんな音夢を、『杉並相手にそんな吠えるな』と嘗つよつた感じで見ていた。

杉並に吠える音夢を見ると、純一は『いい加減覚えろ』と嘗つ。

「杉並」

「先程、朝倉にも言つたが生憎、家には空き部屋が無い。しかし朝倉の家なら空き部屋の一つや二つぐらいはあるだらう」

「音夢」

「それせやつですけど……」

最終的には音夢が杉並に言つてくのめられたのだ。

「杉並」

「それとも、どこにも行く宛の無いサギーを外に放り出すのか？」

「音夢」

「うう……それは……」

音夢が口ごもつた。

なんだかんだ言いながらお人好しの兄妹なので、そんな事は出来ないのだ。

そして、音夢と杉並の争いの元凶となっている頬子はと黙つと、牛丼をジーッと見つめていた。

「頬子」

「私も……せめてこれくらい作れたら……」

頬子は牛丼を掴み、恐る恐る口に運ぶ。そんな事が起きていいとは知らず、純一は音夢と杉並の争いを呆然と眺めていた。

「頬子」

「……」

頬子の顔がだんだん赤みを帯びていく。

「頬子」

「熱い……」

頬子は叫びながら、牛丼を放り投げた。

運の悪い事に、牛丼を食べているつたまるの頭に落ちた。

「うたまる」

「……？」

事態に気付いた純一、音夢、さくら、杉並の四人は呆然と頬子と牛丼を頭に乗せたうたまるを見つめた。

「純一」

「……」

「音夢」

「……」

「さくら」

「……」

「杉並」

「……」

しばらくの間、静寂が朝倉家の居間を包んだ。

「うたまる」

「……」

余りの熱せにうたまるが暴れ出す。

「うたまる」

「うたまる」

「うたまる」

「うたまる」

ガツシャ ン！

うたまるは居間で暴れ、食器を何枚か割り、一階へと上ると音夢の部屋で暴れ、純一の部屋で暴れ回った。

翌日 。

ジリリリ

純一は寝ぼけ眼で、時計を手探りで探す。

ガチャツ

何とか時計を見つけ、目覚ましを止める。  
時計を手に取り、時間を確認する。

時刻は8時20分を過ぎていた。

＜純一＞

「やつべ、遅刻する！」

純一はガバツと起き上がり、制服に着替え、階段を下りた。

＜純一＞

「あれ？」

居間に行くと、頬子がソファーで猫みたいに丸まって、スヤスヤと寝息を立てて眠っていた。

「純一」

「ああ、そうか……昨日、牛丼食つて、その後……」

純一はソファーで丸まって寝ている頬子を見て、昨日の出来事を思い出した。

あの後、純一達は部屋中を掃除して、終わつたのは夜中だったのだ。そう考へると、頬子が熟睡しているのも頷ける。

「純一」

「ん? 何だ、コレ?」

純一がふと見ると、テーブルの上にラップのかかつた牛丼が置いてあつた。

純一が再び頬子を見ると、頬子の側には料理本が開いた状態でソファーから落ちていた。

「純一」

「あれから一人で、この牛丼を……頑張り屋さんなんだな頬子さん……」

再びテーブルに視線を移すと、牛丼の隣りに一枚の手紙がある事に気付き、田を通した。

『兄さんへ

先に学校行つてます。

頼子さんの事は取り敢えず、保留つて事で。

『音夢』

こうして再び朝倉家に平穂が訪れたと共に、新たに住居人が増えたのだった。

SCENE 3-1 (前書き)

今日は花見編。  
純一達は一体どうなるのか。  
感想・評価をしてください。

晴れ渡る青空。

四月だが、まだ弱冠肌寒い。

時刻は昼を過ぎていた。

そんな中、純一、音夢、さくらの三人は桜公園を歩いていた。

今日は日曜日で、本来なら純一はまだベッドの上でぬくぬくと布団の中に入眠っている時間なのだが、なぜ桜公園を歩いているのかと言つと、話は一日前に遡る。

くわくわ

「お花見しようよ

ーーー

と駄々をこねた……もとい、さくらが唐突に提案されたその一言で今日の出来事の始まりだった。

くわくわ

「あーあ、まつたくよ……いい天気だな」

ノリノリの音夢とさくらとは違つて、純一はかつたるそうだ。

くわくわ

かつたりい……こんな天気のいい日は一度寝ると気持ちいいんだよな……

等と考えながら天を仰いだ。

＜さくら＞

「わうだね、絶好のお花見日和だね」

＜純一＞

「要するに、皆で騒ぐための口実が欲しかつただけだろ？」

＜さくら＞

「へへへ でも、お花見したかったのはホントだよ。ボク、初音島の桜は久しぶりだから」

純一の左隣りを歩いていたさくらが、嬉しそうな声を上げた。

＜音夢＞

「改まつて皆でお花見するつて言つのは、それはそれで楽しそうじやないですか」

純一の右隣りを歩いていた音夢はウキウキしていた。

花見をすると言つ事がわかり、今朝から非常に機嫌がいい。

純一は訝しげに音夢を見る。

音夢の機嫌がいい時は、大概純一にとつて悪い事態に陥るのだ。

「純一」

「時に音夢、その手提げは一体……」

純一は不安を押し殺し、音夢の持つてこる手提げを見て尋ねた。  
音夢が持つてこいる手提げは、ちょうど弁当箱が入る位の大きさだ。  
純一は『イヤな予感』がした。

この『イヤな予感』は、一度も外したことではなく百発百中だ。時々、  
『自分はニコータイプの素質があるので?』と思えることがある。  
純一は心の底で、自分が思い描いている物が外れていることを願つ  
た。

「音夢」

「兄さん、その……怒らない?」

「純一」

「俺に怒られるような事を仕出かしたのか? お前は……」

純一の『イヤな予感』は的中した。

『じつやう、まだまだ無敗神話は続きそつだ。』

「純一」

「弁当は要らないと、あれほど言つただひ……」

「音夢」

「だ、だつて……お弁当は皆で持ち寄りなんでしょう？私達だけ持つて行かないなんて、ルール違反じゃない！」

この花見をやる際、弁当は持ち寄りと言つことに決まつたが、さくらを始め、美春も音夢の料理がどれだけ危険か、身に染みて知つていた。

そのため、音夢には弁当を持つてこなくていいと釘を刺したのだ。  
朝倉家の食事事情を理解した上での配慮だつたのだが、朝倉家の食  
物殺人者は、お気に召さなかつたようだ。

「音夢」

「兄さんの分のお弁当は、私が責任持つて作つてきましたから」

何気に『死の宣告』をサラリと言つた。

「純一」

「かつたりい……」

純一はぼやきながら、田地へと歩く。

「ことり」

「朝倉君、ちわっす」

目的地に到着した純一を出迎えたのはことりだつた。

花見の場所は、この初音島で最も大きい木の下だ。

昔、純一とさくらが秘密基地と称した場所でもあり、廣隆、俊樹、信幸、要、圭一の五人が初めて出会つた場所である。

〈廣隆〉

「よつ、朝倉。両手に花か？羨ましいね～」

次に声をかけたのは廣隆だ。

〈純一〉

「この人だけは勘弁してくれ」

嘆いて返した。

〈音夢〉

「何か言つた？お兄ちゃん！」

〈さくら〉

「何か言つた？お兄ちゃん！」

純一の後を追つてきた音夢とさくらが、怒りの炎を生み出した。

普段は、全くと言つていいくらい息が合わない。  
しかし、じつゆう時の音夢とさくらの両名はなぜか息がバツチリ合う。

「純一、  
かつたりい……」

普段見慣れているこの桜も、今日は特別なんだ。と思えば、不思議と新鮮な物に感じた。

純一は、桜を眺めながら『今日は何事もなく、無事終わりますように』と願った。

&lt;眞子&gt;

「遅  
い！－」

純一が青いジーナールシートに座ると、純一の耳に届いた第一声は眞子の怒鳴り声だ。

約束の時間はとっくに過ぎて居たため、純一は返す言葉が無い。

&lt;萌&gt;

「まあまあ、眞子ちゃん。せつかの花見なんですから、怒つて  
いては勿体ないですよ」

萌はいつもマイペースな口調で、眞子をなだめる。

&lt;純一&gt;

「さすが萌先輩、話しがわかる」

&lt;眞子&gt;

「はあ……もひじょうがないわね……」

眞子の左隣りで正座をしていた萌に毒氣を抜かれ、再びシートに座る。

〈美春〉

音夢センハ

11

ワンコ……いや、美春が尻尾を振つて、物凄い勢いで音夢に近づき、抱き付いた。

卷之四

「ちょっと美春、大きな声で呼ばなくとも聞こえるから」

音夢の言つ通り、音夢と美春の距離は1~2mしか無かつた。

〈美春〉

「いえいえ、美春の音夢センパイへの愛は、この程度でおちるものではありません。せめて、声だけでも思いまして……」  
お構いなく

卷之三

「私は構うの！もう……」

音夢は照れ臭そうに言つて、純一の左隣りに腰を下ろした。

「杉並」

「つむ、歯揃つたようだな」

「圭一」

「待ちわびたぞ」

「純一」

「うわつ！ 杉並、北川」

純一の背後から杉並と圭一が、湧き出でてきた。

「純一」

相変わらず、神出鬼没なヤツらだな……

純一がそう思つてゐると、杉並が純一の考へてゐる事に気付いたのが、杉並が純一に言つた。

「杉並」

「ふつ……朝倉お前が今、何を考へてゐるのか手に取るよつにわかる。だが、コレはいつもの事ではないか、あまり気にするな」

「圭一」

「杉並の言つ通りだ。こつもの事なんだから」

「純一」

「へへい。……って、暦先生……」

担任の口調を危うくスルーする所だったが、寸前の所で食い止めた。ことりの隣りに座つてゐるのは、間違いなく、誰がどう見ても暦だった。

「暦」

「どうしたんだ朝倉? そんな、鳩が豆鉄砲をくらつたよいつな顔して

「純一」

「えつ? あつ? ……いや、その、正直意外な方がいらっしゃるなあ……と思いまして……」

「暦」

「なんだい、私が居りやあマズイのかい? それとも、何かよからぬ事でも企んでいるんじゃ無いだろ? うね?」

「純一」

「いえ、滅相もいりやこません」

「暦」

「へへい。……って、暦先生……」

「冗談だよ。今日はことりに誘われてね、こんな大人數で花見をやるんだ保護者の一人や二人いた方が安全だろ?」

〈廣隆〉

「安全? 危険の間違いだよな?」

廣隆は朝倉の耳にそつと囁いた。

廣隆のこの発言が暦の耳に入れば、間違いなく人体実験の材料にされるだろ?。

〈暦〉

「聞こえてるよ相沢」

どうやら、歳の割に耳はいいようだ。

『地獄耳』とはこう言つ事だと廣隆は、理解する事となつた。

〈廣隆〉

「……人体実験の材料だけは勘弁して下さい」

廣隆は暦に懇願するが暦は、不適な笑みを浮かべた。

〈純一〉

「覚悟しといた方がいいんじゃない相沢」

純一は暦の不適な笑みを見て、廣隆に囁き返す。

「暦」

「まつ、 そう言つ事だから今日は、 教師としてじゃなく、 ことりの姉としてここに来たんだ。 そんな堅くなつなくて良いよ」

暦が言い終えると、 純一は辺りを見回した。

メンバーは朝倉兄妹、 さくら、 工藤、 杉並、 水越姉妹、 白河姉妹、 廣隆、 俊樹、 信幸、 要、 圭一、 環、 ななこ、 美春、 アリスだ。 ちょっとした集まりのはずだったが、 いつの間にか規模が拡大した。 さくらが言つたように、 たまには皆で騒ぐのも悪くない。

「アリス」

「先輩……ハイ……」

そつ言つてアリスは純一に、 ジュースの入つた紙コップを手渡す。

「要」

「やつとこれで全員揃つたな」

要は皆の顔を見回して言つた。

その隣りに座つていた圭一が突然立ち上がつた。

「圭一」  
「乾杯の音頭はオレにやらせてもりおつ。……今日は天氣も良く、  
まさに絶好の花見日和……」

「信幸」  
「カソパ イ!!!」

しごれを切らした信幸が圭一より先に乾杯の音頭を取つた。

「みんな  
乾杯!!!」

圭一を除いた皆が信幸に続いた。

「圭一」  
「稻葉、お前な……」

「信幸」

「まだまだだな北川、こう言つた場所では長つたるい挨拶は抜きだ

そう言つて信幸は、紙コップに入つてゐるジュースを一気に飲み干

した。

そんな信幸を圭一は初めて見つめる。

&lt;萌&gt;

「は～い、みなさん、お鍋が煮えましたので、ビーフを鍋に上  
がって下さ～い」

こんな所でも、萌は鍋を忘れないのさすがと喜びだらうか。

物珍しそうに、皆鍋に集まつて来る。

&lt;眞子&gt;

「私は止めとけって言つたんだけどね……」

萌の隣りに座つていた眞子が、身内の恥をあらうけ出すような面持ち  
で、顔を覆いため息をついた。

&lt;なな&gt;

「あれ、鍋の中にシャケが入つてますよ?」

物珍しそうにななこが、鍋の中を覗き込んだ。

&lt;萌&gt;

「は～い、今日は『石狩鍋』なんですよ～」

▼ななし

「へへ、鍋にも色んな種類があるんですね」

萌 <  
>

「そうですねえ。鍋を最初に考えた人を尊敬します。そもそも石狩鍋と言うのは、」

とうとう萌の鍋談義に火が点いたようだ。こうなると、もう誰にも止められない。

卷之三

「フムフム……お鍋一つを取つても、様々な歴史があるんですね」

萌の鍋談義に感心しきつたななこは、ポケットから手帳を取り出し、メモしました。

卷之三

「ホントななこつてメモ魔なんだから」

少々呆れ気味で言つた。

その話しぶりは、まるで長年の親友であるみたいだ。

「廣隆」

「あれ、眞子はななこの事知ってるのか？」

「眞子」

「そりやあね、小学校の時同じクラスだったからね」

「廣隆」

「元・クラスメートってやつか」

「眞子」

「と云つか、何で相沢がななこの事知ってるの？」

「廣隆」

「ん？ ああ、まあ……ヤギがな」

「眞子」

「ヤギ？」

眞子は訝しそうな目で廣隆を見た。  
話の内容がサッパリ見えていないようだ。

「純一」

「ヤギがどうかしたのか？」

廣隆と眞子の話こ、純一と工藤が割つて入ってきた。

＜廣隆＞

「眞子が、何で俺達がなにこの事を知ってるのか、って訊かれてな

＜工藤＞

「あ、なるほどいつ事か

工藤は納得したよつに頭を傾き、眞子は首を傾げた。

＜杉並＞

「時に朝倉、今日はサギーは一緒ではないのか？」

唐突に杉並が訊いた。

杉並の性格から考えると、サギー……もとい、眞子の事が気になつてしまふがないのだろう。

＜純一＞

「眞子さんは留守番だ」

＜圭一＞

「さうか、それは少々残念だ」

〈廣隆〉

「誰だ、そのサギーってのは？」

廣隆は圭一の言葉を遮り尋ねた。

〈杉並〉

「昨日、知り合つた生きた化石でな……」

〈廣隆〉

「昨日知り合つた生きた化石？……何だ、七年振りにいといのいる雪降る町に行って、たい焼きを食い逃げしてゐる少女にでも会つたのか？」

〈杉並〉

「何だその話しさ……？」

杉並は呆れ顔だ。

〈眞子〉

「相沢も相変わらずね……」

眞子はジト目で廣隆を睨む。

「俊樹

「ハハハハ……」

そんな廣隆達を尻目に楽しんでいる者がいた。

俊樹と環である。

俊樹は環が作つてきた弁当を美味しそうに食べている。

「廣隆

「ラブラブですね～」

「信幸

「ですな～」

そんな一人の様子を見た廣隆と信幸は茶化しを入れた。

端から見れば、俊樹と環の一人の関係は恋人と間違えるほど仲が良さそうに見える。

「信幸

「あの二人の関係は、どこまで進んだかな？」

信幸が唐突に訊いた。

「廣隆」

「発展無しに千円」

「信幸」

「それじゃあ賭けが成立しないだろ」

「廣隆」

「なら、稻葉が発展した方に賭ければいいだろ」

「信幸」

「俺は超大穴に賭ける気は無いよ」

廣隆達は廣隆達でかなり盛り上がりがつっていた。

「要」

「どうだ、朝倉。 たまにはいつのまでも悪くないだろ?」

要は俊樹と環を見ていた純一に話しかけた。

「純一」

「あらだな。 たまはいつのものも離へ無こかもな

煙の言づ通つ、たまはいつて離で向かをやると離つて離へな  
いものだ。

つづく

&lt;音夢&gt;

「ねえ兄さ」

&lt;純一&gt;

「あつ、ひとり。それ貰つていいか?」

純一は音夢をスルーしてことりに話し掛けた。  
音夢が何を言おうとしたのか、わかっているからだ。  
判断としては間違つてはいないが、結果としては間違つていた。  
スルーすれば、音夢の怒りが倍増してしまうからだ。

&lt;ひとり&gt;

「ええ、どうだ」

ことつが作ったお弁当は可愛らしく、タコの形をしたワインナーチや、ウサギの形をしたリング「やらが入つていた。

&lt;音夢&gt;

「ねえ、兄さん!」

音夢は純一の襟首をグイッと引つ張つた。

「純一」

「ぐえつー、どいつしたんだ音夢？トイレか？」

「音夢」

「違います！何で私の事無視するんですかー。」

音夢は拗ねたように田を潤ませて、上田遣いで純一を見た。  
そつこつ顔をされると、正直弱い。

でも、騙されではいけない。

騙されれば、音夢の弁当を食べる羽田になる。  
即ちそれは、純一の死を意味するからだ。

「音夢」

「他の方のお弁当を呑し上がるのもいいですが……そんそも私の作  
ったお弁当を食べて欲しいのですが……」

裏モード全開の笑顔で、純一を問いかめる。

音夢の弁当を食べなくても家に帰つて殺<sup>や</sup>られるし、食べても殺られ  
る。

「どうせバジドンHNDは確定だ。」

「純一」

「なあ、音夢。……前にも呑つたと思つが、俺はこのまま帰れる田

本人になりたいんだ」

「音夢」

「そうですか。では私も、兄さんの意見は全て却下させてもらい  
ますので」

純一が敷いた防衛線は、僅か3秒で崩壊した。

「音夢」

「では、兄さん。お弁当をどうぞ」

音夢は満面の笑みで、純一に弁当を差し出した。

しかし、純一から見ると音夢の笑みは悪魔の笑みにしか見えない。

今、朝倉純一が生存を賭けて行える行為は三つある

1・音夢を説得する。

2・何か理由をつけて、そのまま逃げる。

3・被害を最小限に抑えるため、誰かを道連れにする。

1……は無理だろう。

意固地になつた音夢を説得するのは、至難の業だ。

それどころか、自分の首を余計に絞める結果にしかならない。  
なら、2は……こちらも無理だ。

今は逃げ出せたとしても、帰る家が同じなので、後でどんな報復が

あるのかわからない。

では、3ならどうだ?

音夢の持つている弁当箱のサイズから見て、量は一人分だ。それを一人で食べるとなると、純一の意識の致死量を軽く越える。

純一

「…………と訳すで、付き合えー。さくら、相沢」

さくら

「…………」

廣隆

「うわっ……」

鍋を囲つてこたさくらと相沢の襟首をぐいっと掴んだ。

さくら

「今日はこつになく大胆だけど、どうかしたのお兄ちゃん?」

純一

「なあ、さくら。俺の事好きか?」

さくら

「うわっ……」

「う……うん。好きだけ……」

「好きだけ……」

「純一なら、俺と共に死んでくれ」

「さくら」

「……ごめんね、例えお兄ちゃんの頼みでも、それは出来ないよ。ボクは生きてお兄ちゃんの愛を感じたいし……それに、ボクには地獄を見に行く勇気は無いな……」

さすがに付き合いが長いだけあって、純一の言おうとしている事が理解しているようだ。

純一はさくらの説得を諦め、もう一人の生け贋の説得を試みた。

「純一」

「なあ、相沢。俺達、親友だよな?」

「廣隆」

「ああ……無論だ、友よ!」

「純一」

「それなら、俺と共に……」

＜廣隆＞

「……生憎だが、俺はまだ死ぬ気は無い」

廣隆もさくら同様、音夢の弁当を食べる事を拒んだ。

以前、純一と共に音夢の弁当を食べて生死の境を彷徨つた事があった。

そのため、音夢の料理がどれだけ危険か、身に染みてわかっているのだ。

＜廣隆＞

「それにな……音夢さんが作ってきた弁当は一人分だろ？ それを一人で半分で食べば、あの時の二の舞だ」

廣隆が言つ『あの時』とは、2年前に廣隆が初めて音夢の弁当を食べた時の事だ。

あの時、一人で弁当を半分にして食べて、保健室送りになり、それから一週間は胃がもたれて、まともに食事が出来なかつたのだ。

＜廣隆＞

「音夢さんの弁当を中途半端に食べて、悶え苦しむより、一気に食べて死んだ方がナンボかマシだと思つぞ」

と、廣隆は何気に失礼な事を言つた。

「さくり」

「それに、音夢ちゃんが可哀相だよ。お兄ちゃんの為に一生懸命作ったんだから、受け止めてあげないと」

「純一」

「さては、お前達音夢の刺客だな……」

「さくら」

「そんな大袈裟に言つてもダメだよ。気持ちちは分からぬいても無いけどね」

「こちらも廣隆同様、失礼な事を言つた。

「廣隆」

「朝倉、骨ぐらいは拾つてやるよ」

二人の説得を諦めた純一は、覚悟を決めて音夢の作った弁当を物凄い勢いで食べ始めた。

その後、純一が気を失つた事は言つまでも無い。

「づく

純一が、氣を失つてから数十分が過ぎていた。  
未だ、目覚める気配無し。

〈廣隆〉

「よく寝ているな……」

氣絶している純一をつつきながら、廣隆は呟いた。  
廣隆は『反応するかな?』と思いながら、つづいたが、純一は反応  
すらしなかった。  
まるで、死んでいるかのようだ。

〈さくら〉

「アハハ……そうだね。

でもきっと今頃、いい夢でも見ているとゆうよ」

氣絶している純一を見ながら、さくらは苦笑した。

義妹の作ってきた弁当を食べて、氣絶するとは災難としか言こよう  
が無い。

それならせめて、いい夢くらには見ていてほしこと願ひながらだつ  
た。

〈廣隆〉

「いや……自分、悪夢でも見てるんだろう?」

廣隆は、初めて音夢の弁当を食べた時の事を思い出した。あの時は、気を失い、保健室で寝ていたら、音夢の弁当に追われているという悪夢を見た。

そのため、廣隆には分かるのだ。

「眞子」

「それより、相沢……」

眞子は気を失っている純一を、『それ』で片付ける。純一がなぜ気絶しているかなど、氣にも止めていらない様子だ。

眞子の『それ』発言を聞いた廣隆は、純一に同情すら抱いた。妹である音夢の弁当を食べて氣を失い、誰からも心配されないとほんの少しだけ。

まあ……今は、皆楽しんでいるため、純一の事が眼中に入っていないのだ。

「廣隆」

「……可愛いそうな奴」

「眞子」

「ん? 何か言つた?」

＜廣隆＞

「いや、何も。……といひで、何か用か？」

＜眞子＞

「え？ あ……う、うん……これ、作つて來たから……よかつたら……その……」

眞子は顔を真つ赤にして、廣隆に怖ず怖ずと弁当箱を差し出す。

＜廣隆＞

「弁当？ 真子が作つたのか？」

廣隆は、眞子の持つ弁当を訝しげに見つめた。

「じつや、警戒しているらしい。

無理も無い。

つい先ほど、弁当を食べて天に召された奴を知つていいからだ。そのため廣隆は、あの世で純一と再会するのを避けようとした。

＜廣隆＞

「弁当ね……毒とか入つて無いだろ？ 俺はまだ死ぬ気は無いんで……『トイツみたいに』

そう言つて廣隆は、氣絶していた純一を指差した。

「眞子」

「家でも多少は料理をしてたから大丈夫、……多分」

眞子は自信なさげに言った。

それを見ていた廣隆は、より一層の警戒心を抱きながら、弁当の蓋を開け中身を確認した。

見た目は問題なさそうだ。

しかし、問題は味だ……。

廣隆は、眞子から箸を受け取り、恐る恐る食べ始めた。

「廣隆」

「……」

眞子は、廣隆が弁当を食るのを固唾を飲んで見守る。

「廣隆」

「う……」

「……」

眞子の弁当を食べていた廣隆の表情が険しくなった。その様子を見ていた眞子が慌てふためく。

「眞子」

「え？ ちよ……ちょっと相沢、大丈夫？」

「廣隆」

「ウマイ……これ意外にウマイだ」

「廣隆」

「ウマイ……これ意外にウマイだ」

「眞子」

「よかつた……」

眞子は、ホッと胸を撫で降ろすが、廣隆の『ある一言』が引っ掛けた。

「眞子」

「ん？ 相沢、意外つてじつめうつ意味よー。」

「廣隆」

「いや……見た田は完璧だが、味がちょっと……って言うか、かな  
りどうかなって呟つ弁当をさつ見てきたばかりだったからで……」

廣隆は、またもや眞夢に對して失礼な発言をした。

「廣隆」

「ウマイんだが……まあ、付け加えるなら塩加減濃いな」

「廣隆」

「ウマイんだが……まあ、付け加えるなら塩加減濃いな」

廣隆の感想に、眞子の眉間にシワが寄る。

そんな事など気にも止めずに、次々と感想を言つ。

〈廣隆〉

「ゆで卵なんて、湯で過ぎで消しごムみたいで……」

眞子は右手を握り、発射体勢を整えた。

〈廣隆〉

「そうそう、それと」

「ブチ！」

我慢していた眞子の堪忍袋の緒が切れた。

〈眞子〉

「バカ！」

眞子の怒りの鉄拳が、廣隆の腹部を襲つ。

〈廣隆〉

「ぐふつ！－！」

廣隆は、そのまま天へと召されて逝つた。

＜俊樹＞

「ん？ 」の一人、どうかしたのか？

先ほどまで、環と楽しくやつていた俊樹がさくらと眞子に近づいてきた。

＜さくら＞

「一ヤハハ……一人は、ちょっと長い眠りについているだけだよ」

さくらは、曖昧な返事をした。  
普通の反応は、首を傾げるか、問い合わせかのどちらかだが、俊樹の反応は違っていた。

＜俊樹＞

「迷わず成仏してくれ」

大体事情を飲み込めた俊樹は、一人に黙祷を捧げた。

＜俊樹＞

おそらく今頃は、あの世で一人仲良くやつているだろ？

等と考えながら、一人を放置し、環の元へと戻つていった。  
さくら、眞子の両名も一人を放置し、鍋を囲んだ。  
こうして花見は、純一と廣隆の一人の不名誉な戦死と共に幕を降ろ  
した。

つづく

祝アクセス数8千ヒット突破！

読んでいる方々、本当にありがとうございます。  
評価・感想などして頂ければ幸いです。

大台の1万まで、後2千！！

夢の舞台へ駆け上がれ！

……つて、違うか……

七月を過ぎ、猛暑の影響のためだらうか、梅雨の時期だと言ひのてあまり雨は降らず、季節は夏を迎へようとしていた。

「俊樹

「次！ サービ、行くぞ！」

校庭から俊樹の声が聞こえた。

その次に聞こえたのは、『カキン』といつ、金属バットでボルを打つた音だ。

「廣隆

「ん？ 俊樹か……アイツ、妙に張り切つてるな」

長年俊樹と一緒にいたが、こんな俊樹は初めて見た。滅多に熱くなる事の無い俊樹が、ここまで熱くなるには何か理由があるのだろう。

「じり

「あ、相沢君。ちわっす」

廣隆は俊樹に魅入ってしまい、廣隆を呼ぶ声がするまで気付かなか

つた。

振り返るとこゝりが鞄を後ろ手で持ち、廣隆を覗き込むような形で立っていた。

「こゝり

「何を見てるんですか？」

「廣隆

「野球部の練習」

廣隆の後ろにいたこゝりは彼の隣に移り、校庭で熱心に野球部の後輩の指導をしていた俊樹に視線を移した。

「こゝり

「相楽君があんなに熱くなるなんて、何かあったのかな？」

廣隆同様、同じ事を思つたようだ。

普段落ち着いているヤツが、今日に限つて熱くなっているのだ。

俊樹を知つてゐるヤツは、恐らく『何があったのでは？』と思つてしまつだらう。

「信幸

「ん？ どうしたんだ、一人とも」

信幸は部活の休憩中に廣隆、ひとつの一人を見つけて話しかけた。

「廣隆

「いや……俊樹のヤツ、何でみんなに熱くなってるんだ？」と思つてな

「信幸

「「」この日の土曜日に練習試合があるんだ。それで、熱くなってるんだ」「

「廣隆

「練習試合？」

廣隆は訝しむ。

今まで何度も練習試合をやってきたはずだが、こんなに熱くなつた姿は一度とも見た事は無かつた。

そのため、廣隆や「」とは勿論、野球部の後輩も少し困惑ついていた。

「信幸

「ああ。今度の土曜に海棠学園と練習試合があるから、アイツあんなに熱くなつてるってワケ」

「ううつ」

「海堂って、あの海堂？」

信幸は黙つて頷く。

海堂学園とは、甲子園の常連で、そりで何人のプロ野球選手を送り出している野球の名門校だ。だが、問題はそこでは無かつた。

俊樹にとつて、一番の問題とは海堂にいる、ある人物だつた。

＜廣隆＞

「“俊也”と試合するから、俊樹のヤツあんなに熱くなつてたつて事か……」

これで廣隆は全てを理解した。

しかし、ひとりだけは未だ話しの内容を理解できていなによつだ。

＜ひとり＞

「あの……“俊也”って誰なんですか？」

“俊也”……………とつはこの“俊也”と書つのが誰で、俊樹とどんな関係なのか知らなければ全てわからないだらう。

「廣隆」  
「斎藤俊也昔、俊樹とバッテリー組んでたヤツで、俊樹のライバルつてどこかな?」

VOLUME 1

へ、  
そ、  
う、  
だ、  
ん、  
だ。

……あれ、確かに前に誰かから聞いた話なんですけど、相楽君は海堂学園から声が掛かつたけど、断つて風見学園に来たって……」

「本当だよ」

వుంగిలివ

「でも何で風見学園に？」

相楽君の実力なら、海棠学園に行こうて力口だつて目指せるのに

なぜ海堂学園に行かず、風見学園に来たのか、ことには不思議でしうがなかつた。

アロを直指す氣が無いのでは? とさえ思つたが、では、」Jとりはそのままずつと歌を歌い続けるのか? と訊かれたら、頷く事も否定する事も出来ない。

そのため 仮に俊樹が不口を自撮す気か無いと言ったとしても これは疑問を抱かないだろう。

廣隆

「オレも一度俊樹に、」ひとつ全く同じ事を訊いたんだ。  
「…………」

「アーティラリーライフ」

『全国から、野球の上手いヤツを集めてるんだから甲子園や、プロに行けるのは当たり前だ。そんな所に行つたって、つまらないし、面白く無いからな。それよりは強豪校をぶつ倒す方が面白いだろ』

＜廣隆＞

「……だつてよ」

＜ことり＞

「アハハ……本当に破天荒な人ですね、相楽君つて」

ことりは俊樹の新たな一面を見たような気がした。

ことりの俊樹へのイメージは、冷静で熱しにくく冷めやすいというイメージだったが、今回的事で180°俊樹のイメージが変わった事は言つまでも無い。

つづく

「ストライク！ バッターマウト！ スリーアウト、チョンジ

一回表を終えて、風見学園は三者連続三振に抑え、幸先のいいスタートを切っていた。

「俊也」

「ふ～ん、中々やるじやん」

風見学園のピッチャーを見て俊也は呟いた。

監督の話では、風見学園のピッチャーは一年だと聞いている。

海堂学園で一軍のレギュラーになれなかつたものの、各地から強豪を集めて作った二軍を一年のピッチャーが抑えたと言つ事は、かなりの実力だと言つ事だ。

しかし、海堂学園の一軍に比べれば実力はかなり劣るが。

俊也は、風見学園のピッチャーを見て、俊樹・信幸のコンビを見ながらマウンドに向かつ。

「ひとり

「ねえ、神君。 今日の試合の相手って、海堂学園の一軍ですかね？」

試合を見ていって、疑問に思つたことつま更に尋ねた。

俊樹があれほど真剣な眼差しをしているのだ、その相手が二軍にいると言う事がことりには信じられなかつた。

卷八

「いや、アイツは一軍だよ。恐らく、監督に頼んで今日の試合に

そう、要の言つ通りだつた。

俊也は優樹と真剣勝負しないがためは、監督は頼み一軍のビンテージとしてレギュラーに入れてもらつたのだ。

俊也

俊樹は四番かアイツとの勝負は、次の回までおあずけだな

俊也は三人で抑える気満々だ。自意識過剰と言われてもいい、俊也はそれだけの実力があると自負していた。

俊樹

今の後輩達じゃ、三振するな。  
も、内野ゴロだな

俊樹もまた俊也と同じ考え方でいた。

一番バッターの一年がバッターボックスに立つと、俊也は構えキャラ

ツチャードのサインを見て頷く。

対風見学園戦の第一球が放たれた。

バッター ボックスに立った一年は、タイミングを測ろうとするが、そんな間も無くキャッチチャーミットにボールが吸い込まれたようだ。感じた。

恐らく140kmは出でんだろう。

「俊樹」

……速い

俊也の投球を見た俊樹の背中に、イヤな汗が流れた。

今俊也の実力なら、恐らくプロとして充分やつていけるだろう。俊樹は俊也の実力を目の当たりにし、戸惑いを隠せなかつた。

正直、自分や助つ人である信幸でも打てるかどうか……。

先程までは、後輩が打てなかつたとしても、自分と信幸の二人が打てれば問題無いと思っていたが、今は一人でも打てるのか、それすらわからなくなつた。

「俊也」

「どうやら驚いているようだな

このバッターなら、力を押さえても三振は簡単に取れる。

しかし、俊也は全力で投げた。

それには、理由があつたからだ。

ここで力を押さえて、このバッターを三振にしても、面白くないと言つ理由だ、それなら一球だけ全力で投げて、俊樹に俊也の実力を

見せつけてやるつと思つて至つた。

「純一」  
「速え……」

純一は俊也の投球を見て驚愕の声を上げる。  
俊樹や信幸は勿論の事、風見学園の後輩や、応援にきた純一達は言葉を失つた。  
一番打者が三振し、続く一番・二番打者も三振といつ結果に。

「俊也」

「楽勝だな。あとは俊樹と信幸の一人だけを気をつければ、この試合勝てるだろ」

守備につく信幸・俊樹を見て、バットを握り締め、バッターボックスに立つた。

「俊也」

「久しぶりだな、俊樹。

戦えて嬉しいよ」

「俊樹」

「オレもだ」

言い終えると、俊樹はどう攻めるか考え始めた。

＜俊樹＞

さあ、どう攻めようか……まずは、コイツの苦手のコースから突いてみるか

俊樹はピッチャーにサインを送り、ピッチャーの田崎は頷くと、ボールを投げた。

俊樹の注文通り、内角低めのシンカーが投げられた。

「ストライク！」

コースは際どかつたが、何とかストライクと判定された。  
田崎の投げた球は、内角低めでボール半分入っていたが、もし審判  
が違つていたらボールと判定されただろう。

＜俊樹＞

「どうした、俊也？　ストライクだぞ！」

ボールを投げ返して、俊也に言った。

＜俊也＞

「ああ、わかってる。

……あのピッチャー、一年だと聞いたが

「さうだが、それがどうした?」

「俊樹

」

「いや……別に、何でも無い

」

「いや……別に、何でも無い

」

服の上からではわからないが、そこそこ筋肉のついた男だと云つことはわかる。

コントロールも良し、球の早速さもある、だがこの程度の実力のヤ

ツは、海堂学園には「ゴマん」ところ。

「俊也

」

……恐らく次のコースは

「俊樹

」

次も同じコースだとコイツに打たれる可能性がある。 それな

……

俊也をチラッと見ると、次のサインを出した。

田崎は、首を縦に振る。

一球目は、外角高めのスライダーだ。

これも注文通りだつたが『カキ ンー!』といつ金属音が鳴り響いた。

俊也がバットの芯で、ボールを捉らえたのだ。

ボールはぐんぐんセンターの頭上を越え、外野のフェンスを軽々越えた。

そう、俊也がホームランを打つたのだ。

ピッチャーの田崎や応援しに来た純一達は絶句し、俊樹・信幸は歎を嘆み締めた。

＜俊也＞

「いいピッチャーだが、海堂こはこれくらいの選手は山ほどいる。悪いがこの試合、オレ達が勝たせてもらひ!」

そう吐き捨てる俊也は一塁ベースに向かう。風見学園は、先制点を海棠に許してしまった。

一回を終わって、1・0で風見学園は負けていた。

〈信幸〉

「オレ達一人が打たないと、この試合負けるな」

信幸は呟いた。

後輩達では、手も足もでないと言う事は火を見るより明らかだ。  
二回裏の攻撃は、四番の俊樹から始まり、五番信幸と続く。  
俊樹はバッター・ポックスに立つと、バットを高々と掲げた。  
そのバットの先は、明らかに俊也を指している。

俊樹は俊也に挑戦状を叩きつけた。

〈俊樹〉

絶対アイツには負けられない！

〈俊也〉

面白い……勝負だ！

俊也は不適な笑みを浮かべた。

高揚感が込み上げてくるのがわかる。

俊樹とこうやって真剣勝負をするのは初めての事だ。

今まで、チームメートであつたために、勝つために協力する事はあ

つても、真剣勝負した事は一度も無く、何度俊樹と真剣勝負してみたいと思つた事か。

海棠学園に入学してからもその想いは変わらず、俊樹と真剣勝負するためには努力してきたのだ。

三年……長いような短いような年月を経て、今やつとこいつして真剣勝負が出来るのだ、ワクワクしない訳がない。

俊也は俊樹・信幸に対しても手加減する気は無かつた。

この一人は、後輩達とは違い、実力はあると考えていて、手加減などしたら、海棠学園が……俊也が負ける事は目に見えていたからだ。第一球を振りかぶつて投げた。

外角低めのカーブ、判定はストライク。

続く二球目は、内角低めのシューートだ。

俊也は俊樹が見逃し、もしくは空振りだと思っていたが、俊樹はライト前に流し打ちをし、出塁する事に成功した。

続くバッターは信幸で、初球に低めのストレートをセンター前に打つた。

しかし後が続かず、結局六番・七番・八番は三者連続三振に抑え、二回を終わる。

＜純一＞

「強いな、相楽と稲葉の一人が一点も取れないとは

純一は本音が零れた。

俊樹や信幸の実力は、純一とて知つている。

そのため、海棠学園から一点も取れない、つまり相手がそれだけの実力があると言つ事だ。

「工藤」

「相手が海堂学園だからね。むしろ、一点に抑えていふと云ひ事の方がスゴイと思つよ」

「環」

「相楽様……」

環は心配そうに俊樹を見つめた。

この試合、1-0で風見学園が負ける事は環には見えていたからだ。環には予知能力という不思議な力があった。その能力の事は誰にも話していない。

無論、俊樹にも。

「要」

「ん？ どうかしたのか、環」

心配そうに見つめていた環に、要が話しつけたが、環はハッとして、慌てて首を振った。

「環」

「いえ、何でもありません」

「純一」

「大丈夫だよ、環。アイシジなら勝てるって

「さくら」

「一やハハ お兄ちゃんの言つ通りだよ

先程まで野球に夢中になつていたさくらは、俊樹・信幸の一人が勝てる信じていた。

勿論、さくらだけでは無く純一や音夢、応援にきた皆、俊樹達が勝つと信じている。

たが、回を重ねるに連れ、敗色濃厚となってきた。

それに加え、田崎の疲労度も増してきた、たが風見学園の選手は二人しかいないとは言つても、そのうち三人は怪我をして試合に出ることも叶わない。

信幸が助つ人にきていて、一人だけ控えがいるがまだ野球初心者だ。そんなヤツを試合に出すわけにはいかない。

「俊樹」

「アイツ遅いな……」

もう一人の助つ人を待つていては、この試合は負ける事は確実。それならばと想い、俊樹は立ち上がった。

「俊樹」

「美春、ちょっと来い」

そう言って、俊樹は美春を手招きする。

「美春」

「何ですか、相楽先輩？」

俊樹の元に近寄った美春は、なぜ自分が呼ばれたのかわからないと  
言つような顔だ。

「俊樹」

「お前に頼みがあつてな……」

「美春」

「美春にですか？」

「俊樹」

「実はな……」

俊樹は美春に耳打ちをすると、最初は話を聞いていた美春はイヤそ  
うな顔をしていたが、次第に嬉しそうな顔に変わった。

「美春」

「お任せ下さい！ 不肖天枷美春、かなりず連れてきますー！ で

は

敬礼したかと思つと、美春は意氣込んで、どこかへ走り去つて行った。

＜音夢＞

「ねえ、相楽君。 美春はどこで向かったの？」

＜俊樹＞

「ちよつとお使いを頼んだ」

＜音夢＞

「？」

音夢は首を傾げた。

そんな俊樹の様子を見ていた俊也は、何か作戦でも考へてゐるのか？とも思つたが、勝利しか頭にない俊也にはそんな事、もはやビックリのいい事だった。

前話から大分日数が経ちました。  
この駄文ばかりの小説を読んで下さっている方々、申し訳ありません。  
ん。

今回から、小説の書き方を変えました。  
少しずつですが、これ以前の話も変えていくつもりですので、良かつたら読んでやって下さい。

照り付ける太陽の下、美春は一人の少年の腕を掴み、俊樹が待つグランドに向かつて全力疾走していた。

少年・相沢廣隆は美春に腕を掴まれ、走ると言つより引きずられている。

寝起きらしく髪は逆立つてあり、徹夜で麻雀をしていたオッサンのよつに眼の下には立派な隈が出来ていた。

「……ちょっと待て美春！」

「待てません！相楽センパイが待つてるんですから、急いで下さいよ相沢センパイ！」

美春に引きずられつつも不満の声を上げる廣隆だが、その声は無情にも美春に一蹴された。

何で、こんな面倒な約束しちまつたんだ、オレは？

事の発端は前日、バイトが終わり帰宅しようとしていた所に、俊樹から助つ人の誘いを受けた。

最初は断わった廣隆ではあつたが

『勿論タダで　なんて、ムシの良い事は言わない。　これで手を打たないか?』

そう言つて、廣隆に見せびらかしたのは、一本のゲームソフトだ。パッケージには“ヒーローハンター”と書かれている。

『これを相沢にやるつて言つたら、お前はどうする?』

廣隆は信じられないとでも言いたげな表情で、それを　俊樹を見据えた。

“ヒーロー・ハンター”とは、つい先日発売されたゲームで、プレイヤーは悪の組織の一人となり、ヒーローを倒して世界征服を目指すというモノで、マニアの間では割りと評価が高いが、万人受けはしていないため、販売元が限られている。

それに加え、給料日前という事もあり未だ購入しておらず、入手は半ば諦めていた。

『その助つ人、オレが確かに引き受けた!』

そんな経緯があり、迷う事なく一つ返事で引き受けたのは当然の流れだと言えよう。

……安請け合いしなければ良かつたか?

今更ながら後悔する廣隆であつたが、もう後の祭り。

こうなつた以上、行くしかないと諦め半分、開き直り半分で俊樹の待つグランドへと向かう廣隆だった。

試合は1-0のまま六回を投げ終わり、終盤へと差し掛かっていた。俊也は俊樹・信幸の二人を危険視し、常に敬遠したため二人は出墨するものの、その後が続かない。

高校野球の名門、海道学園の一軍とは言つても、そのメンバーは他の学校に通えば一軍のレギュラーとて簡単に取れる程の実力を有している。

勝つどころか、一点で抑えているのが奇跡だと言えよう。だがそれもここまで。

まだ四月ではあるが、その気温は真夏と呼べる程に暑い。

炎天下、プレッシャー、その他の色々な重圧が田崎を追い詰めた。

田崎は疲弊し、交代すらままならない。

何せ、こちらには海道学園と互角にやり合うだけのピッチャーがない。

否、幾ら人数が少ない風見学園とて、控えの投手がいない訳ではない。だが、ケガをした三人の内一人がその控えの投手であるため交代が出来ないのが現状だ。

ギリッと唇を噛み締め、悔しそうにマウントを眺める俊樹。

一人だけ補欠がいるが、野球初心者だ。

その上、相手が海道学園と聞いてビビりまくっている。

そんなコンディションの中で、彼を試合に出すのは無謀とも言える。いや、それを言つたらこんな状態の中で海道学園と試合をすること事態が無謀だ。

しかし、この際贅沢な事は言つてられない。

サードの信幸をピッチャ―に代え、田崎の代わりに補欠の1年小笠原をレフト、野球経験者であるレフトの加藤をサードに入れようとした俊樹。

正直な話、田崎より信幸の方がスピード・コントロール共に上回っている。

なら何故最初から信幸をピッチャ―にしなかったのか？

理由は簡単だ。信幸をピッチャ―にしてもよかつたのだが、田崎の実力は海道の一軍にどこまで通用するのか試してみたかった、ただそれだけだ。

何本かヒットは打たれはしたものの、それでも一点に抑えられた。この練習試合を組んだのも田崎と自分自身、そして今の風見学園野球部の実力を知りたかったからだ。

もつとも、ケガ人続出で野球部としての実力は測れなかつたが。ともあれ、田崎と自分自身の実力を知る事が出来た。

それだけで充分。

これ以上、田崎に負担を掛ける訳にはいかない。覚悟を決め、三人目の打者が三振したのを見届け、俊樹はスッと立ち上がる

「相楽センパ　イ！」

廣隆の腕を掴み、駆け寄つてくるワン口。

「美春、じ苦勞！」

頭を撫でる俊樹、それに尻尾を振つて応じる美春。

それはさながら、ご主人様に頭を撫でられ喜ぶ犬のようだ。

「ホレ、約束のブツだ」

「有り難うござります ！」

俊樹はガサゴソと鞄をあさり、一房のバナナを取り出ると、それを美春に渡した。

受け取つた美春はと言つと、ブンブンと激しい勢いで尻尾を振る。栄養補給の為に持つてきたバナナがこんな形で役に立つとは思いもよらなかつたが、なにはともあれ役者は揃つた。

俊樹は改めて、俊也は見やる。

その視線に気付いた俊也も俊樹を見据え、続いて廣隆に視線を移した。

『何で、<sup>アイツ</sup>廣隆がここにいるんだ?』とでもいつかのような表情だ。そんな俊也を他所に、俊樹は審判に交代を告げ守備につく。

「アイツ、寝起きなのに大丈夫なの?」

マウンドに上がる廣隆を見て、眞子が不安そうな声を上げた。

廣隆の田元の隈と櫛も通していないボサボサの髪を見れば、彼が寝起きだという事ぐらい誰にでも容易に想像出来る。

それ故に、眞子は心配になつた。

あんな状態でまともなピッチングが出来るのか、と。

そもそも、廣隆にピッチャーなんて大役が務まるのか？

それも、こんな重要な場面で。

そう感じたのは眞子だけではないらしく、その場にいた要　圭一・  
杉並の両名に至っては何を思っているのかは不明だが、以外の人物はかなり心配そうだ。

廣隆の体育の授業態度は不真面目で、それに加え純一程ではないが、  
よく『かつたるい』と口にしている。

最も、授業態度は体育に限らず全教科不真面目だが。  
そんな奴がピッチャー、しかもこの大事な局面で大役を担う事など  
出来るのか？

そう疑問を抱くのは当然の事だと言える。

そしてその疑問は俊樹の怒声で、確実なものになりつつあった。

「ど！」投げてんだ！構えてる所に投げろ！」

「つるせー、こつちは寝起きなんだ仕方ねーだろ！」

投球練習をしていた廣隆の球は、俊樹が構えていたキャッチャー＝ミ  
ットから大きく外れ、彼の後ろのネットに突き刺さった。

後ろに転がった球を取り俊樹は廣隆に球を返すと、それを見た海道  
学園側から罵倒、嘲笑の声が上がる。

「オイオイ、あのピッチャーかなりノーワンだな」

「ラッキー、バッターボックスにつつ立てるだけで墨に出来る」

「やる気あんのかー風見学園ー！」

そんな廣隆を見て、乾いた笑みを浮かべる俊也。

“昔の”廣隆ならいざ知らず、“今”廣隆では海道学園を抑える事など出来る訳がない。

そう言いたげな笑みであった。

海道学園の7番打者が打席に立つ。

バットを肩で担ぎ、構える様子もない。

先程の投球練習を見て構えなくとも出墨出来ると判断したのだろう。俊樹がサインを出し、キャッチャー・ミットを構える。

それに頷き、廣隆は大きく振りかぶつて第一球を投げた。

「ストライク！」

廣隆の投げた球は、真っ直ぐ俊樹の構えたキャッチャー・ミットに吸い込まれるように入つていった。

呆然と立ち尽くすバッター。

驚き、先程までの嘲笑や罵倒の声を失う海道学園。

廣隆の放った球は何の事はない、ただのストレート。

俊樹の構えたキャッチャー・ミットに入つていた事に驚いた訳じゃない。

驚いたのは、彼の放つた球のスピードだ。

俊也の放った渾身のストレートのMAXスピードが140km。対して廣隆の放った球はそれを上回る程の球速で、推定150kmオーバー。

プロでも中々出せる者はいない球速。

その一球で、海道学園のベンチの空気が一瞬で凍つた。

「 速え……」

不安を抱きつつ、この試合を観戦していた純一は驚愕の声を上げた。  
無理もない。

いつもやる氣のなさそうにだらけている廣隆から、誰が想像出来ようか。

プロ顔負けの球速を放てると。

それは夢や幻、偶然ではないようで、続く二球目も初球と同じスピード、同じコースでキャッチチャー・ミットに球が入る。  
バッターの予測した通りのコースに球が来たのだが、予測しただけでは150kmという速球を打ち返す事など出来るはずもなく、バットは虚しく空を切る。

マグレじゃない……！

ベンチから廣隆の速球を見ていた俊樹は、ギリッと歯を噛み締めた。  
完全にタ力を括っていた。

廣隆に海道学園は抑えきれない、と。

舐めて掛るな。

俊樹の中の何かが警鐘を鳴らす。

先程の乾いた笑みから一転し、廣隆を真っ直ぐに見据えた。  
その目は強敵を見るかのように鋭いモノだ。

「せういえば、相沢つて右利きじやなかつたつけ？」

続く八番打者を抑えた所で眞子が疑問の声を上げ、純一は『そつ言われば』とそれに応じた。

眞子の言つように廣隆は右利きで、グローブは左手に着けるのが普通なのだが、今の廣隆は右手にグローブを着け、左手で投げている。とすれば、ホントは左利きなのではないか？

と言つ結論に至るのは当然の事だらう。

「なあ榊、相沢つてホントは左利きなのか？」

そつ尋ねた純一に要はチラッと一瞥し、再び視線を廣隆へと戻した。

「いや、相沢は右利きだ」

昔から廣隆を知つてゐる要が言つのだ、まず間違いないだらう。ならば何故、廣隆は左で投げてゐるのか？

純一がそう問掛けようとして、要がソレを遮つた。

「相沢は、元々右投げだつたんだけど、ガキの頃に右肩を壊したんだ。それ以来、左で投げてるんだよ」

「相沢センパイって、野球少年だつたんですか？」

意外そうな声を上げ、美春はマウンドに立つ廣隆に視線を移した。その表情は、今の廣隆からは想像出来ないとでも言いたげだ。

「想像出来ねえ……」

「相沢君に失礼ですよ、兄さん」

純一は眩きを洩らし、音夢がそれを諫めた。

「だが、音夢。お前は想像出来るか？相沢が野球少年だつたって

「う……それは……」

音夢は口ごもった。

正直に言つのならば、想像出来ない。

それは仕方のない事だろつ。

純一に負けず劣らずの不真面目な廣隆に、元野球少年だと誰が想像出来ようか。

「ストライク！バッターアウト、スリーアウトチェンジ！」

「おっ、また三振。意外と凄いヤツだったんだな、相沢って」

7回を三者連続三振に切って取った廣隆。  
そんな廣隆に、工藤は驚きの声を上げる。

「最初はどうなるかと思ったが、ボールも伸びてるしこそ調子だぞ」

ベンチへと向かう途中、俊樹は廣隆に近寄り左肩をポンッと軽く叩いた。

「そりや、どーも」

何ともやる気のない声を上げる廣隆だが、その表情は声とは裏腹にやる気満々といった感じで、常に不真面目で、やる気の欠片も見せない彼にしては珍しい表情だ。

俊樹は右手をグッと握り締め、廣隆に突き出す。

それを見た廣隆も俊樹同様に左手を握り締め、突き出された拳を小突いて返した。

それは一人にとつては挨拶や儀式のようなモノで、特に何の意味もないのだが、これをやらなければ、何ともしつくりこないのだ。

そのため、この行為に何の意味もないという事は解つてはいるが、ついやってしまう。

言わば、クセやジンクスの類のモノだ。

そんな二人を、苦虫を噛み潰したかのような眼で見つめる者がいた。俊也である。

先程までの余裕の笑みは既に身を潜め、鋭い視線を一人に向けマウンドに向かう。

気にいらない

何故かそんな思いが、俊也を支配した。

何がそんなに気にいらないのか？

そう自問しても、明確な答えが導き出される事は無かつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8481a/>

---

D.C. ~refrain love stories~

2010年10月31日03時19分発行